

早稲田大学本庄高等学院 2020 年度学校自己評価・関係者評価

2021. 4. 30
早稲田大学本庄高等学院

0. コロナ禍における 2020 年度学校運営

0.1 2020 年 3 月まで

2020 年 1 月から感染拡大した新型コロナウイルスは世界中に、この原稿を書いている 2021 年 5 月をもってなお、未曾有の危機をもたらしている。

2020 年 2 月 27 日に発出された全国一斉休校の要請により、本校は 3 月 2 日より休校とした。3 月 3 日から開始予定だった 2019 年度学年末試験を実施することができなかった。このことの後に及ぼす影響が懸念されたがやむを得なかった。特例措置として全員の進級を認めた。早稲田大学は 2 月 27 日に卒業式・入学式の中止を発表しており、附属校である本校もその措置に従った。

例えば 2020 年 3 月 9 日における全国の感染者数は 26 名であった。今と比較すると「この程度の数字で！」と驚くが、当時はまったく未知の病気であり、仕方がなかったといえる。大学では臨時の学術院長会や教務主任会などの重要会議が増え、新型コロナウイルス対策本部が作られた。本校でもまったく未経験のこの事態に対し、臨時教諭会の数が増えていった。

0.2 3 月～5 月 10 日オンライン授業開始まで

(ア) 早稲田大学は 3 月 6 日の時点で、授業開始を 4 月 20 日以降にすることを発表した。3 月 24 日時点で 5 月 11 日にすることを発表した。4 月 1 日時点で春学期の授業を原則としてオンラインで行うことを発表した。また、外出自粛要請が出されている場合は、原則出校禁止とし在宅勤務を余儀なくされた。

(イ) 本庄学院でもこのことを受け、5 月 11 日から当面の間オンラインで授業を行うことを 4 月 2 日に決めた。ただ、大学と異なり、新入生、クラス替えがある 2 年生はまったくクラスメートの顔を知らない状況であることから生じる生徒の不安を考え、5 月 7 日 8 日 9 日をガイダンス・始業式・LHR を行う登校日とした。オンライン授業に備え、生徒の情報環境の実態について全生徒に対してアンケートをとった。この結果を、非常勤を含む全教員に共有し、オンライン授業の参考に供した。

(ウ) また、オンライン授業開始までの一か月間について、生徒の不安を解消し学習の習慣を失わないようにするため、4 月 20 日までに授業準備課題・推薦図書などのオンライン提供を教員に要請した。教材のオンライン提供を可能にするため、特に新入生に対して、Waseda Net のアカウント取得、Microsoft Office365 のダウンロード（早稲田大学ではライセンス契約により無料）、早稲田大学の授業支援システムである Moodle の使い方についてマニュアルを作り、郵送し、各自 4 月上旬までに取得させた。

(エ) 日常的な学校生活に可能な限り近づけるための教員や生徒による自発的な努力がなされた。例えば、例年放課後の特別講義として実施している「これがサイエンスだ!」、ミニシンポジウム「国際交流への誘い」、授業に対する質問コーナー、部活動・生徒会活動紹介が Zoom で実施された。

(オ) 不運なことに早稲田大学全体の授業支援システムが 2020 年度に、それ以前の早稲田大学オリジナルの Course N@vi から世界の主要大学で利用されているオープンソースの Moodle に変更された。生徒も教員もまったく使い方がわからなかったため、このことが混乱を助長した。が、今から考えると、機能の少ない Course N@vi ではおそらく対応できず、Moodle の高機能が多様なオンライン授業を可能にしたともいえる。早稲田大学が作ったマニュアルはあったが、説明が少なく使いにくかったため、高校の授業で使われるであろう機能にフォーカスし、4 月中旬までに、生徒向け、教員向けの Moodle マニュアルを作成し、配布した。同時に、リアルタイム授業で利用することになるであろう Zoom のオリジナルマニュアルも配布した。

(カ) 緊急事態宣言発出後に帰国し、2 週間の待機生活を余儀なくされる寮生の対応に追われ

た。待機するホテル等も指定されておらず、また日本の待機宅にお年寄りがいる場合は住むことができないため、寮の多目的室（見回りの教員が宿泊することを想定して作られた部屋）をその場所に充て、外出時間や動線を制限するなどの措置をとらざるを得なかった。在寮している生徒たちの健康チェックのため、公共交通機関を使わずに登校できる教員の当番を組み、毎日寮訪問を実施した。また、5月11日から6月一杯オンライン授業となったため、入寮・帰寮が遅れた。このことが後々、寮費の清算の問題、既に寮に滞在している帰国生たちのメンタルの問題などにつながっていくことになる。

- (キ) 生徒や保護者の不安を解消するために、従来は一か所だった質問のメールアドレスを、「生徒の不安や悩み相談」「学校生活に関する相談」「ITに関する相談」「寮に関する相談」に分けた。それぞれに対して担当者を分けて、迅速に返信することを申し合わせた。このことは結果として、5/11以降オンライン授業開始後、効果的に機能した。
- (ク) 指導要領に沿った年間計画の下、時間割に沿った授業を行えばオンライン授業を授業時数と認めるという確認を行ったうえで、休校期間の授業時数を埋めること、学校行事の見直しを含め、夏休み期間の縮小等大幅な学校行事の見直しを行った。
- (ケ) 2020年度いっぱい、会議はすべてZoomで行うことを決めた。
- (コ) 学校の広報誌の発行等、通常の学校サービスを可能な限り実施した。

0.3 5月11日～6月27日フルオンライン授業期間

- (ア) 6月27日（土）までをオンライン授業期間とし、6月29日（月）以降2班に分けての分散登校とした。
- (イ) オンライン授業開始後の2週間は接続できない・Moodleの使い方が分からないなどのトラブルが多いことを予想し「慣らし期間」とし、すべて出席扱いとした。実際、この期間はトラブルが多発で、IT関連の相談メールも極めて多かった。また、5月11日、オンライン授業初日は、早稲田大学全体がオンライン授業開始したため、サーバの負荷が高まり、実施困難な授業が多発した。しかし、3週間目からは一気にトラブルの相談が減少した。
- (ウ) 6/29からの分散登校に向けて、学校の体制の検討を行った。2班に分け、月水金、火木土（次週以降週毎に入れ替え）の登校班とし、非登校班には授業の様子をリアルタイム配信するか、教材をオンデマンド配信を行った。生徒に対して、一か月毎の健康チェックシートの継続記入を義務付け（寮生は4月から実施）、教員が当番を組み、登校時にシートの確認と検温を行うこととした。部活動は6月28日以降制限付き実施可能とした。食堂の椅子を削減し、教室等の着席不可の椅子に×を付けた。感染不安から登校拒否をする生徒に対しては、文科省の指針より、出席停止扱いにすることを確認した。
- (エ) 段ボール会社と相談し、すべての教室に対してパーティションを設置した。事務所・保健室・食堂にはアクリル板のパーティションを設置した。また、日常の体温チェックに役立てるため、校舎エントランスに高解像度のサーマルカメラを設置した。
- (オ) 教室・体育館・ホールの換気量が厚労省基準に沿うことを確認した。
- (カ) 生徒の健康や不安に関するアンケートを実施し、結果を教員間で共有した。
- (キ) 感染者が出た場合の対応マニュアルを作り、確認した。
- (ク) 本庄駅・本庄早稲田駅へ「6月29日から登校開始」という挨拶を行った。
- (ケ) オンライン授業であっても通常の学校生活に近づけるため、放課後の課外講義（キャリアデザイン講座・「留学のススメ」講義など）・部活動など（例えば、茶道部ではオンラインでお稽古を行うなど）のオンラインの取り組みを継続した。

0.4 6月29日（月）～8月1日（土）分散登校期間

- (ア) 7月30日（木）3学年全員の生徒健康診断を実施した。この実施については、学校教育法に決められており、当初は4月に実施予定であったが、休校措置のため、繰り延べとなっていた。本庄市医師会のご協力の下、なんとか実施することができた。
- (イ) 当初2週間の分散登校の後、一斉登校に踏み切る予定であったが、7月に感染の第二波が始まり、結局1学期終業である8月1日まで分散登校継続を余儀なくされた。
- (ウ) 寮生に対する分散登校期間中の生活指針を案内した。
- (エ) 通常の間試験実施期間に授業進行が十分でなかったため、中間試験を中止とした。1学期の授業時間確保のため、通常7月初頭に行っている期末試験を夏休み明け8月31日～9月4日に

学年ごとに登校時間帯を3分割して行うことを決定した。

(オ) 第1回学校説明会をオンデマンド配信で行った。2020年度は残りの説明会もすべてオンデマンド配信で行うこととし、配信期間を一週間とした。

(カ) 稲稜祭（文化祭）をオンラインで実施することとし、Zoomで生徒実行委員との議論を重ねた。

0.5 8月2日（日）～8月30日（日）夏休み期間、8月31日（月）以降2021年1月20日（水）まで

(ア) 試験明け9月5日～12日の一週間を様子見で分散登校とし、9月14日（月）から一斉登校とした。

(イ) 新型コロナウイルス感染に対する正しい知識を得ることを目的として、9月17日（木）のLHRで生徒に向けて、国際医療研究センター感染症専門医鈴木先生の講義をオンラインで実施した。また、保護者に向けてオンデマンドで配信した。

(ウ) 例年、第1回目の保護者会を6月に実施しているが、今年度はそれができていなかった。9月20日にZoom配信での保護者会を開催した。

(エ) 4月の段階で台湾・韓国・北京3コースの修学旅行を国内九州を中心とした3コースに変更していたが、それも中止とした。結局、代替として上田・大谷石・日光3コースの日帰り遠足を10月23日に実施した。

(オ) 1年生は入学式ができなかったため、大隈講堂に入っていない。大学生でも大隈講堂に入らずに卒業する学生がおり、大隈講堂を経験することが附属生としてのアイデンティティ育成につながるの、是非経験させてほしいという保護者の声が寄せられていた。その声を受け、10月22日（木）に1年生対象に大隈講堂で早稲田大学の歴史に関する講演会を実施した。また、例年入学式で行っている大隈講堂前での記念撮影会をクラス毎に行った。

(カ) 1・2年生が学年行事である10月22日（木）を使い、3年生の球技大会を実施した。また午後に、6月に実施できなかった体育祭のミニ版（綱引きと全員リレーのみ）を実施した。3年生が遠足で不在の10月23日（金）に1・2年生の球技大会を実施した。

(キ) 生徒・教職員に向けて、オンライン授業に関するアンケートを実施し、まとめたものを教員間で共有した。同時に、4月以降学校に寄せられた保護者からの苦情や要望のメールをまとめ、教員で共有した。

(ク) 2020年度卒業式実施可否の検討を行った。2021年1月の段階で「2分割し、対面で実施する」ことを決定した。

(ケ) 稲稜祭を10月31日（土）11月1日（日）にオンラインで実施した。セキュリティや著作権に配慮し、「リアルタイムで学内でのみ視聴可能」「オンデマンドで学内者のみ視聴可能」「オンデマンドで学外者でも視聴可能」の3つのカテゴリーに分けて配信を行った。オンデマンドは1週間配信した。

(コ) 秋に感染状況が改善されたため一旦寮生に対する生活のガイドラインを緩めたが、12月以降の第三波により、ガイドラインを厳しいものに戻さざるを得なかった。

(サ) 入試における新型コロナウイルス感染対策の検討を始めた。

(シ) 12月13日（日）にオンラインで保護者会を開催した。クラス懇談・生徒面談もZoomで行った。

(ス) 11月2日（土）まではオンライン授業準備や少しでも休み時間を長くし食堂の混雑を低くすることを目的として、45分の短縮授業を行っていた。しかし、一方で学力維持や食堂の混雑緩和には役立っていないのではないかという意見があり、11月4日（月）から通常授業に戻した。

(セ) コロナ禍の混乱が2021年度も継続することを予想し、11月の段階で早々に、2021年度修学旅行を2泊3日の国内旅行とすることを決定した。

(ソ) 12月の段階で、2021年度入学式を大隈講堂で対面で行う（ただし、生徒のみ）ことを決めた。

(タ) 1月13日の臨時教諭会で、1月7日の緊急事態宣言を受け、1月18日から分散登校とすることを決めた。しかし、その後濃厚接触者が多く出ている現状などに鑑み、21日から再度フルオンライン授業に切り替える決定をした。

0.6 1月21日（木）～3月10日（水）まで

- (ア)1月21日からフルオンライン授業に踏み切ったが、体育や芸術など実技を伴う科目ではオンラインでの成績算出が難しいこと、対面で生徒の質問を受け付ける時間が欲しいこと、生徒のメンタル面のケアを考え、2月12日（金）～2月18日（木）の間を一斉登校とした。また、仮にこの間に感染者が出て濃厚接触者認定された場合でも2週間の期間において、全員学年末試験を受けられるように、試験開始日を1日下げ3月5日～10日（9日は卒業式）とした。一斉登校期間は、休み時間や食事時間に密にならない、会話をしないことの指導のために、教員が当番を組み、巡回した。
- (イ)3月9日（火）に、午前午後2分割し、生徒のみで卒業式を稲稜ホールで実施した。式の模様をリアルタイム配信するとともに1週間オンデマンドで配信した。
- (ウ)3月10日以降の部活動等生徒活動の指針、寮生活のガイドラインを策定した。

0.7 オンライン授業に関する生徒・教職員アンケートから

まったく経験のないところで急遽開始を余儀なくされたオンライン授業であるが、重要なことはやりっぱなしにせず、良い点悪い点を整理し、今後再び感染拡大しオンライン授業をせざるを得ない状況下ではより良いオンライン授業作りに活かすとともに、コロナ禍が収束してもより教育効果の高い授業運営のために、対面にオンライン授業の良さを加えるといった授業改革に活かすことである。その意味で、生徒・教職員の意見をまとめることは重要である。

以下は、生徒・教職員に取ったアンケート結果をまとめたものである。量が膨大なため、その一部を紹介する。

(ア)生徒アンケート結果

※ 2020年5月11日～6月27日、フルオンライン授業期間を主とし、および4月20日～5月10日の自習課題提示期間、6月27日～8月1日の分散登校・オンライン授業ハイブリッド期間を対象。

※ 学年、性別ともほぼ、均等

3. フルオンライン授業期間（5月11日～6月27日）全般について

問 12

12

2020年5月11日～6月27日までのオンライン授業やその間に実施された授業以外のオンラインプログラム（Zoomを用いた課外講義・キャリア講座・部活動紹介・ミニシンポジウム等）の**全体的な満足度**について、最も当てはまるものを選択してください。

回答	平均	合計
満足している	13%	71
どちらかといえば満足している	34%	190
どちらともいえない	35%	194
どちらかといえば満足していない	10%	55
満足していない	8%	45
質問に対する回答の合計	90%	555/620

問 13

13

2020年5月11日～6月27日までのオンライン授業の全体的な満足度について、最も当てはまるものを選択してください。

回答	平均	合計
満足している	9%	51
どちらかといえば満足している	34%	205
どちらともいえない	30%	178
どちらかといえば満足していない	16%	96
満足していない	11%	66
質問に対する回答の合計		96% 596/620

問 14

14

2020年5月11日～6月27日までのオンライン授業期間に実施した、授業以外のオンラインプログラム（Zoomを用いて実施した課外講義・キャリア講座・部活動紹介・ミニシンポジウム等）の全体的な満足度について、最も当てはまるものを選択してください。

回答	平均	合計
満足している	14%	75
どちらかといえば満足している	32%	168
どちらともいえない	35%	184
どちらかといえば満足していない	9%	45
満足していない	9%	48
質問に対する回答の合計		84% 520/620

※ これについては、参加自由であり必ずしも全員が参加しているわけではない。

問 15

15

オンライン授業期間中に、次のような不安や悩みがありましたか。それぞれ最も当てはまるものを選択してください。
理解できていない授業の内容が

回答	平均	合計
よくあった	22%	129
まあまああった	50%	298
あまりなかった	27%	164
全くなかった	1%	7
質問に対する回答の合計		96% 598/620

問 16

16

オンライン授業期間中に、次のような不安や悩みがありましたか。それぞれ最も当てはまるものを選択してください。
本庄学院生活が楽しくないと思うことが

回答	平均	合計
よくあった	18%	104
まあまああった	29%	171
あまりなかった	36%	209
全くなかった	17%	100
質問に対する回答の合計	94%	584/620

問 17

17

オンライン授業期間中に、次のような不安や悩みがありましたか。それぞれ最も当てはまるものを選択してください。
感染してしまうのではないかと不安に思うことが

回答	平均	合計
よくあった	12%	74
まあまああった	26%	155
あまりなかった	47%	279
全くなかった	15%	87
質問に対する回答の合計	96%	595/620

問 18

18

オンライン授業期間中に、次のような不安や悩みがありましたか。それぞれ最も当てはまるものを選択してください。
クラスの人間関係・友人関係が築けるか不安に思うことが

回答	平均	合計
よくあった	28%	165
まあまああった	29%	174
あまりなかった	25%	150
全くなかった	17%	102
質問に対する回答の合計	95%	591/620

問 19

19 オンライン授業で「良かった」点をすべて選択してください。

回答	平均	合計
自分のペースで学習できる	71%	417
自宅で学習できる	71%	418
対面授業より集中できる	11%	66
教材がわかりやすい	7%	41
復習が何度でもできる	56%	329
教員に質問しやすい	8%	50
ICTについて知識やスキルが高まる	22%	129
通学時間を学習に有効活用できる	53%	313
その他	4%	21
質問に対する回答の合計	95%	589/620

問 21

21 オンライン授業で「困った」あるいは「改善してほしい」点をすべて選択してください。

回答	平均	合計
教員に質問がしにくい	51%	311
集中力が続かない	61%	372
Moodleの使い方が難しい	24%	143
オンライン授業で用いたPCやタブレットの操作に慣れていない	22%	131
動画や資料のアップロードが遅れて、あるいは不定期に提示された	50%	303
課題提出ができていないのか不安だった	72%	433
インターネット環境が十分でない	24%	146
プリンターがないので資料印刷に困った	13%	81
課題が多い	71%	429
授業の教材の内容がわかりにくい	32%	196
勉強のペースがつかみにくい	54%	325
友達と一緒に学べず孤立感を感じる	44%	268

目や肩、耳などに身体的な疲れを感じる	70%	422
リアルタイム型授業でビデオオンにする（顔を出す）ことにストレスを感じる	45%	274
授業の方法が様々でストレスに感じた	49%	294
その他	3%	17
質問に対する回答の合計	98%	605/620

問 24

24

新型コロナウイルス感染症拡大による、経済的あるいは学習環境への影響について、当てはまるものすべて選択してください（複数選択可）。

回答	平均	合計
家庭内の不和や争いが増えた	16%	79
主たる家計収入が減少した	13%	63
PCやWiFiを購入したり、新たに通信環境を整備する必要があった	33%	160
気分が落ち込み、不安にかられたりやる気のない時間が増えた	73%	356
食欲不振や不眠等の体調不良が多くなった	26%	127
その他	7%	32
質問に対する回答の合計	79%	491/620

4. オンライン授業内容について

問 34

34

5月11日～6月27日の間に学習した科目のうち、【自身にとって有益であったオンライン授業】を最大3つまで想定してください。2科目もしくは3科目ある場合は、「より有益であったと考える順」に回答してください。

最も有益であった授業はどのようなスタイルでしたか？

回答	平均	合計
ZoomやCollaborateによるリアルタイム授業	35%	200
オンデマンド動画主体の授業	52%	295
PDFやWord、PowerPointによる資料が主体のオンデマンド教材	13%	72
質問に対する回答の合計	91%	567/620

問 35

35

最も有益であったと考える授業の区分で、該当するものを選択してください。

回答	平均	合計
講義主体の授業	78%	427
実習等作業を必要とする授業	14%	77
体育・家庭・芸術等実技を必要とする授業	1%	7
レポート課題や小試験のみの授業	7%	39
質問に対する回答の合計	89%	550/620

問 36

36

最も有益であったと考える授業について、最も当てはまるものを選択してください。
生徒の発言が求められる。

回答	平均	合計
当てはまる	16%	88
どちらかといえば当てはまる	25%	140
どちらかといえば当てはまらない	28%	158
当てはまらない	31%	175
質問に対する回答の合計	90%	561/620

問 37

37

最も有益であったと考える授業について、最も当てはまるものを選択してください。
提出した課題に対するフィードバックがあった。

回答	平均	合計
当てはまる	30%	164
どちらかといえば当てはまる	30%	164
どちらかといえば当てはまらない	20%	111
当てはまらない	20%	113
質問に対する回答の合計	89%	552/620

問 38

38

最も有益であったと考える授業について、最も当てはまるものを選択してください。
授業時間内に生徒同士が学び合う

回答	平均	合計
当てはまる	17%	92
どちらかといえば当てはまる	23%	125
どちらかといえば当てはまらない	25%	139
当てはまらない	35%	195
質問に対する回答の合計	89%	551/620

問 39

39

最も有益であったと考える授業について、最も当てはまるものを選択してください。
授業内容や授業の進め方に生徒の意見が反映される

回答	平均	合計
当てはまる	33%	184
どちらかといえば当てはまる	36%	199
どちらかといえば当てはまらない	19%	107
当てはまらない	12%	67
質問に対する回答の合計	90%	557/620

問 40

40

最も有益であったと考える授業について、最も当てはまるものを選択してください。
小テストやレポートなどの提出物がある

回答	平均	合計
当てはまる	30%	168
どちらかといえば当てはまる	38%	214
どちらかといえば当てはまらない	19%	105
当てはまらない	13%	71
質問に対する回答の合計	90%	558/620

問 58、問 59

58

満足していない授業は全体としてどんなスタイルが多かったですか？

回答	平均	合計
ZoomやCollaborateによるリアルタイム授業	33%	156
オンデマンド動画主体の授業	26%	123
PDFやWord、PowerPointによる資料が主体の授業	42%	201
質問に対する回答の合計	77%	480/620

59

満足していない授業全体について、最もあてはまるものを選択してください。

回答	平均	合計
講義主体の授業	49%	232
実習や作業を伴う授業	12%	57
体育・家庭・芸術等で実技を必要とする授業	9%	42
レポート課題や小試験のみの授業	30%	139
質問に対する回答の合計	76%	470/620

問 60

60

満足していない授業全体について、最もあてはまるものを選択してください。
生徒の発言が求められる

回答	平均	合計
当てはまる	16%	77
どちらかといえば当てはまる	14%	65
どちらかといえば当てはまらない	14%	66
当てはまらない	55%	259
質問に対する回答の合計	75%	467/620

問 61

61

満足していない授業全体について、最もあてはまるものを選択してください。
課題に対するフィードバックがあった

回答	平均	合計
当てはまる	5%	22
どちらかといえば当てはまる	12%	54
どちらかといえば当てはまらない	21%	99
当てはまらない	62%	287
質問に対する回答の合計		75% 462/620

問 62

62

満足していない授業全体について、最もあてはまるものを選択してください。
授業時間内に生徒同士が学び合う

回答	平均	合計
当てはまる	9%	40
どちらかといえば当てはまる	11%	49
どちらかといえば当てはまらない	17%	80
当てはまらない	63%	294
質問に対する回答の合計		75% 463/620

問 63

63

満足していない授業全体について、最もあてはまるものを選択してください。
授業内容や授業の進め方に生徒の意見が反映される

回答	平均	合計
当てはまる	4%	16
どちらかといえば当てはまる	8%	38
どちらかといえば当てはまらない	22%	102
当てはまらない	66%	299
質問に対する回答の合計		73% 455/620

問 64

64

満足していない授業全体について、最もあてはまるものを選択してください。
小テストやレポートなどの課題がある

回答	平均	合計
当てはまる	39%	183
どちらかといえば当てはまる	29%	133
どちらかといえば当てはまらない	11%	52
当てはまらない	21%	98
質問に対する回答の合計		75% 466/620

問 66

66

オンライン授業期間中の生活のうち、次のことに最もあてはまるものをそれぞれ選択してください。
授業以外の勉強をする時間が増えた

回答	平均	合計
当てはまる	25%	137
どちらかといえば当てはまる	32%	179
どちらかといえば当てはまらない	24%	132
当てはまらない	19%	103
質問に対する回答の合計		89% 551/620

問 67

67

オンライン授業期間中の生活のうち、次のことに最もあてはまるものをそれぞれ選択してください。
本庄学院の友人と授業について連絡を取り合う時間が増えた

回答	平均	合計
当てはまる	30%	166
どちらかといえば当てはまる	39%	220
どちらかといえば当てはまらない	15%	86
当てはまらない	16%	87
質問に対する回答の合計		90% 559/620

問 68

68

オンライン授業期間中の生活のうち、次のことに最もあてはまるものをそれぞれ選択してください。
本庄学院の友人と授業以外について連絡を取り合う時間が増えた

回答	平均	合計
当てはまる	22%	122
どちらかといえば当てはまる	28%	155
どちらかといえば当てはまらない	29%	159
当てはまらない	22%	120
質問に対する回答の合計		90% 556/620

問 69

69

オンライン授業期間中の生活のうち、次のことに最もあてはまるものをそれぞれ選択してください。
家族と話す時間が増えた

回答	平均	合計
当てはまる	35%	190
どちらかといえば当てはまる	35%	192
どちらかといえば当てはまらない	18%	98
当てはまらない	13%	70
質問に対する回答の合計		89% 550/620

問 70

70

オンライン授業期間中の生活のうち、次のことに最もあてはまるものをそれぞれ選択してください。
海外の友人と連絡を取り合うことが増えた

回答	平均	合計
当てはまる	6%	33
どちらかといえば当てはまる	8%	41
どちらかといえば当てはまらない	9%	51
当てはまらない	77%	413
質問に対する回答の合計		87% 538/620

問 71

71

オンライン授業期間中の生活のうち、次のことに最もあてはまるものをそれぞれ選択してください。
趣味にかかる時間が増えた

回答	平均	合計
当てはまる	41%	228
どちらかといえば当てはまる	34%	189
どちらかといえば当てはまらない	12%	65
当てはまらない	14%	76
質問に対する回答の合計	90%	558/620

問 72

72

オンライン授業期間中の生活のうち、次のことに最もあてはまるものをそれぞれ選択してください。
読書をする時間が増えた

回答	平均	合計
当てはまる	17%	92
どちらかといえば当てはまる	27%	149
どちらかといえば当てはまらない	24%	133
当てはまらない	33%	183
質問に対する回答の合計	90%	557/620

問 73

73

オンライン授業期間中の生活のうち、次のことに最もあてはまるものをそれぞれ選択してください。
新しい興味・趣味を開拓することに時間をかけるようになった

回答	平均	合計
当てはまる	34%	191
どちらかといえば当てはまる	32%	177
どちらかといえば当てはまらない	17%	92
当てはまらない	17%	96
質問に対する回答の合計	90%	556/620

問 74

オンライン授業期間中の生活のうち、次のことに最もあてはまるものをそれぞれ選択してください。
夜更かしをすることが多くなった

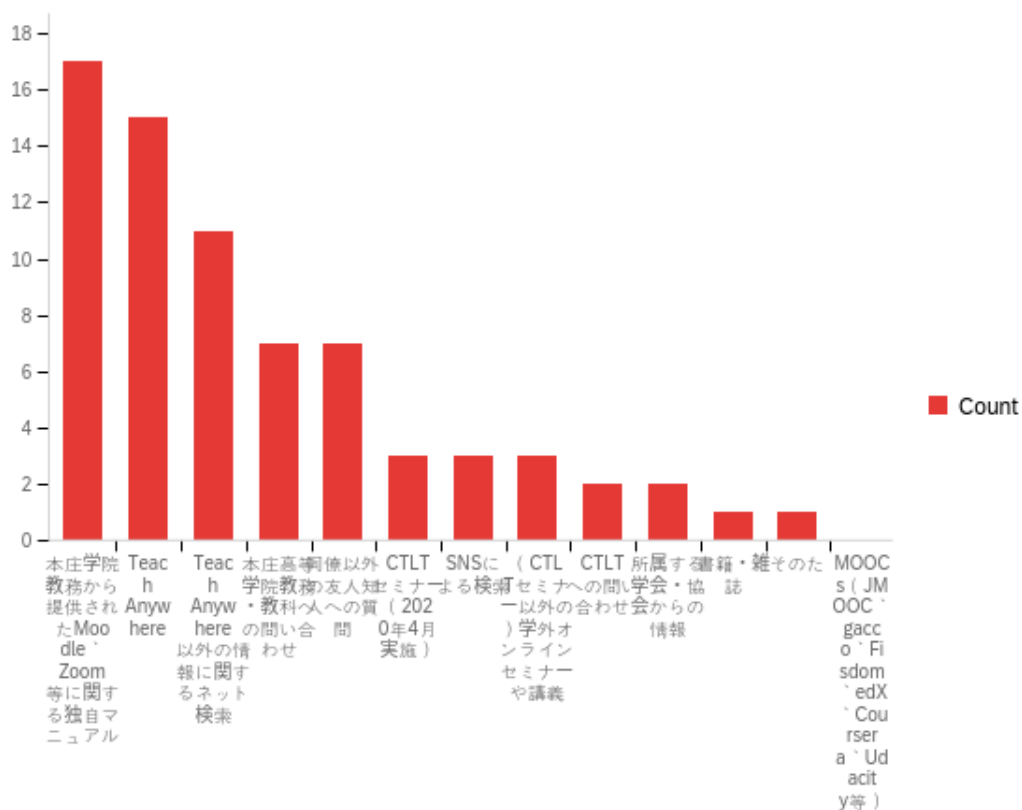
回答	平均	合計
当てはまる	36%	202
どちらかといえば当てはまる	31%	172
どちらかといえば当てはまらない	17%	96
当てはまらない	16%	88
質問に対する回答の合計	90%	558/620

(イ)教職員アンケート結果

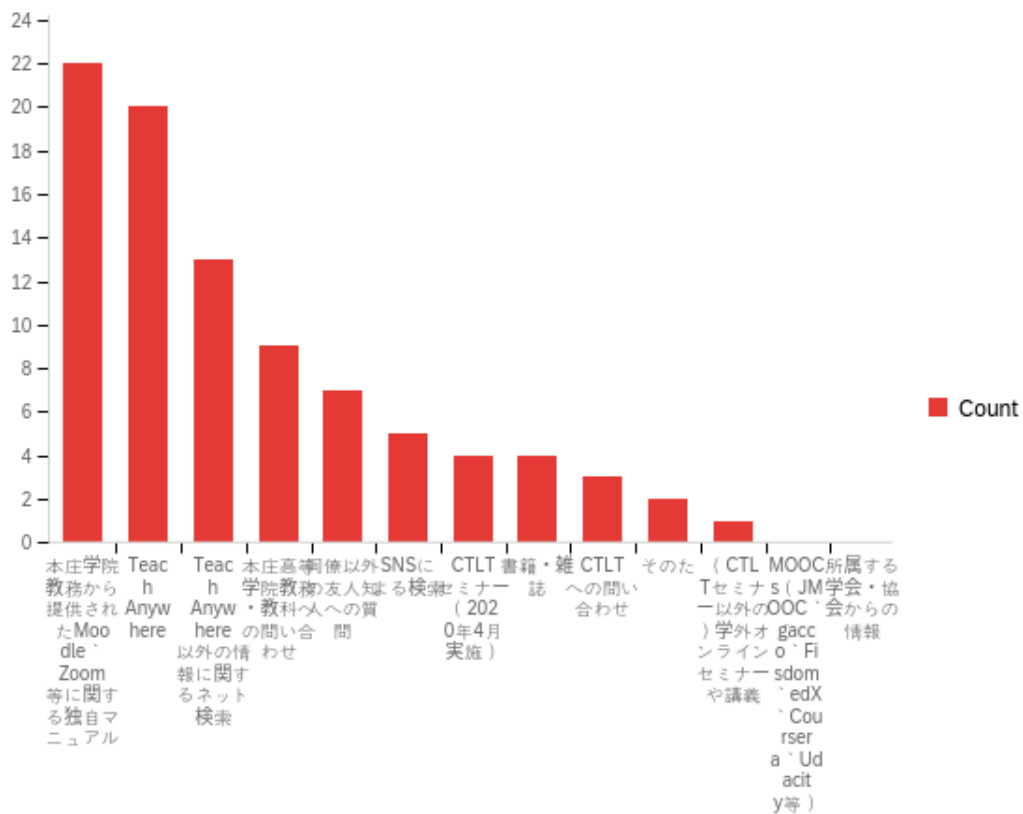
□ 回答数 専任教員 21、非常勤講師 28

Q8 情報収集のために何を利用しましたか（複数回答可）。

専任教員

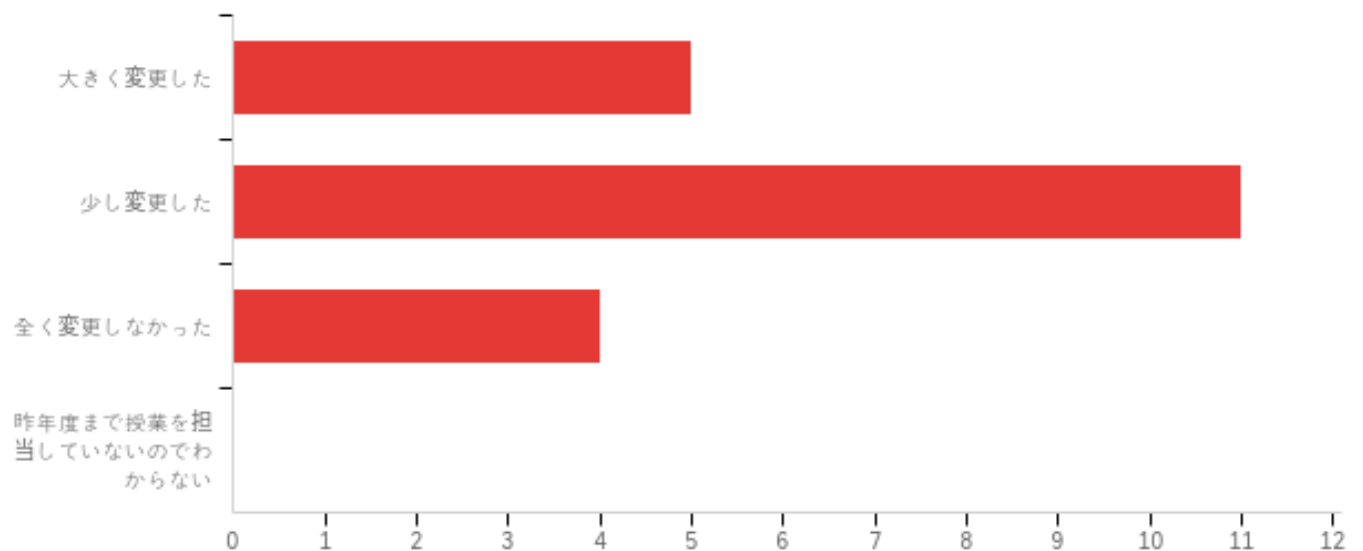


非常勤講師

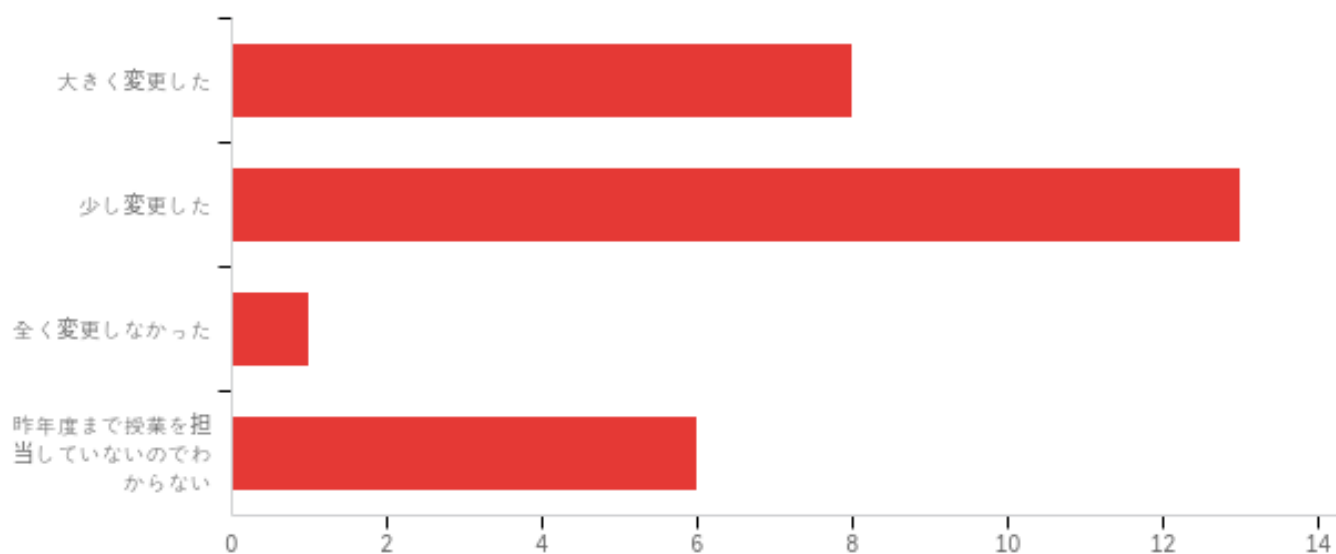


Q10 オンライン授業をするにあたり、それ以前にご自身がおやりになっていた授業から内容や教材を変更しましたか。

専任教員

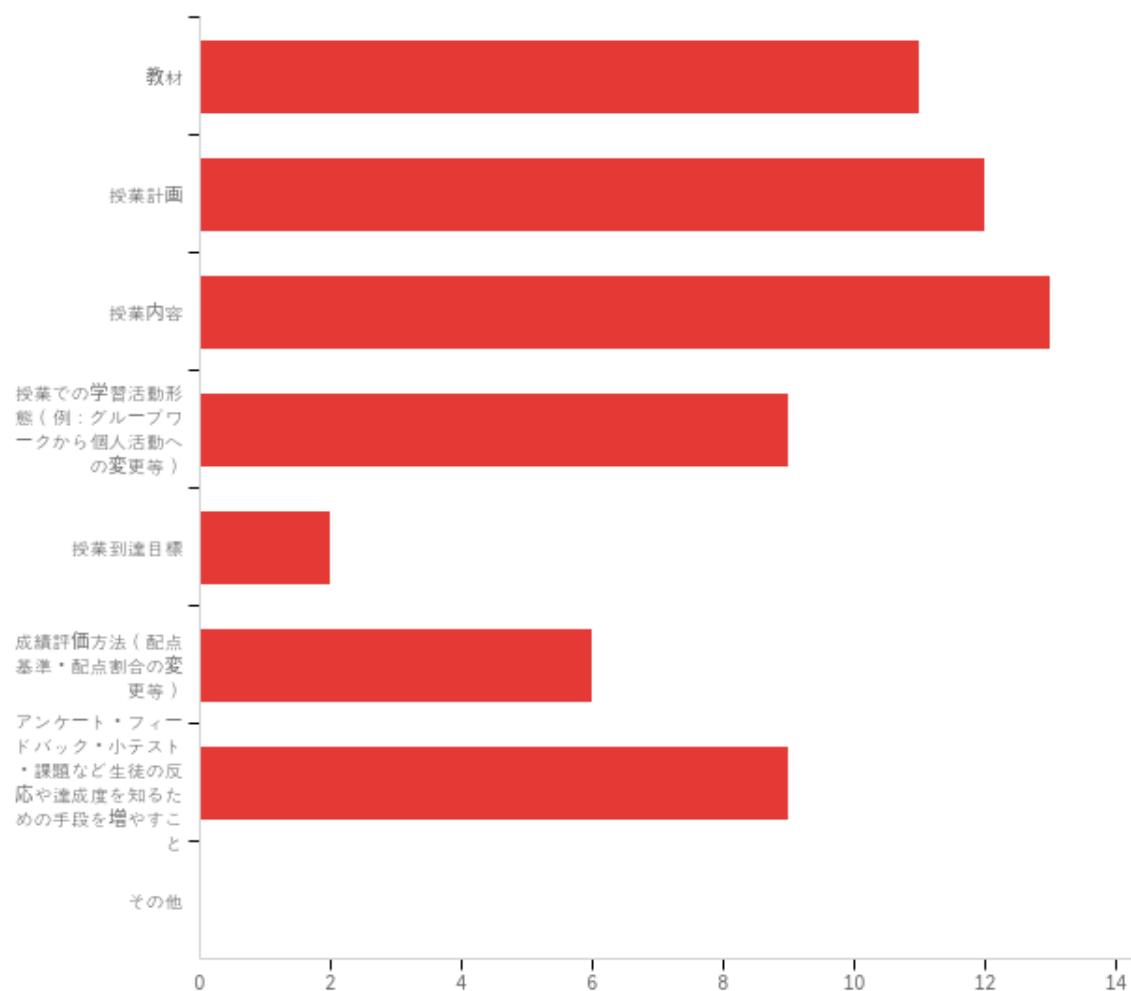


非常勤講師

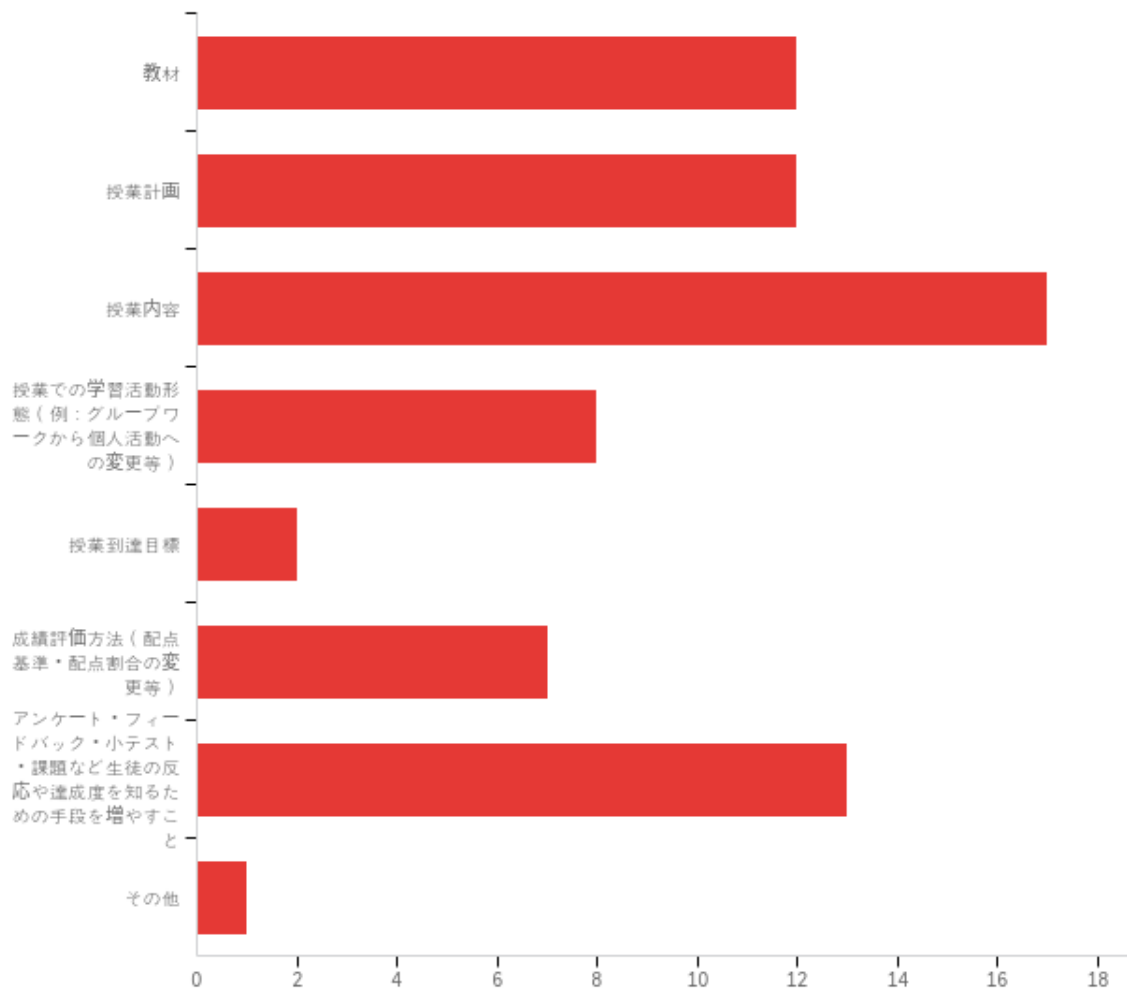


Q11 (Q10で「大きく変更した」「少し変更した」と回答した場合のみ) どのような点を変更しましたか(複数回答可)。

専任教員

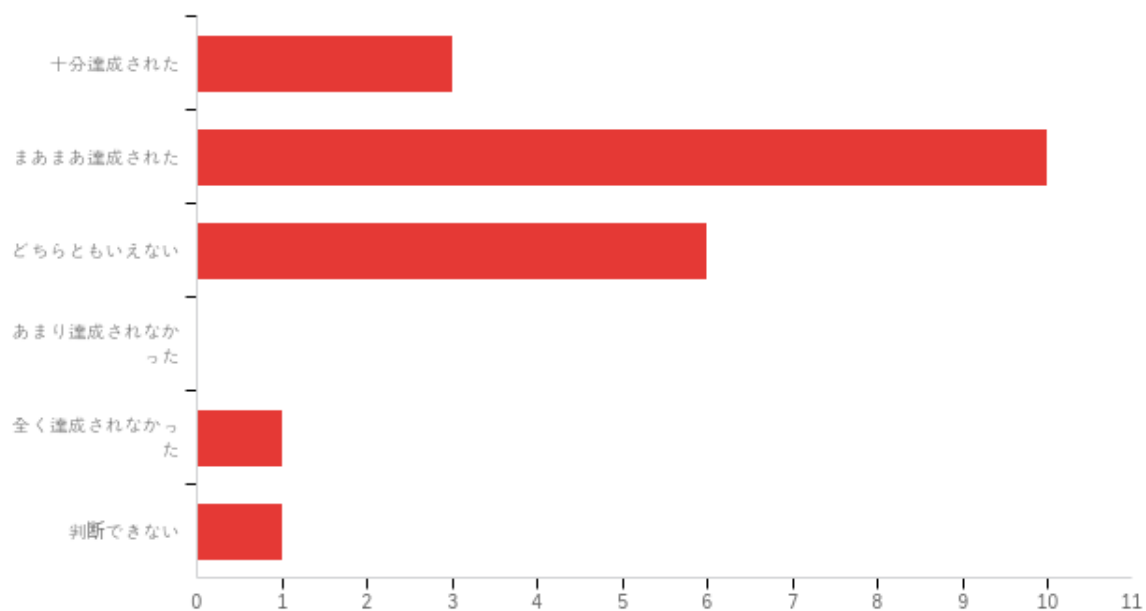


非常勤講師

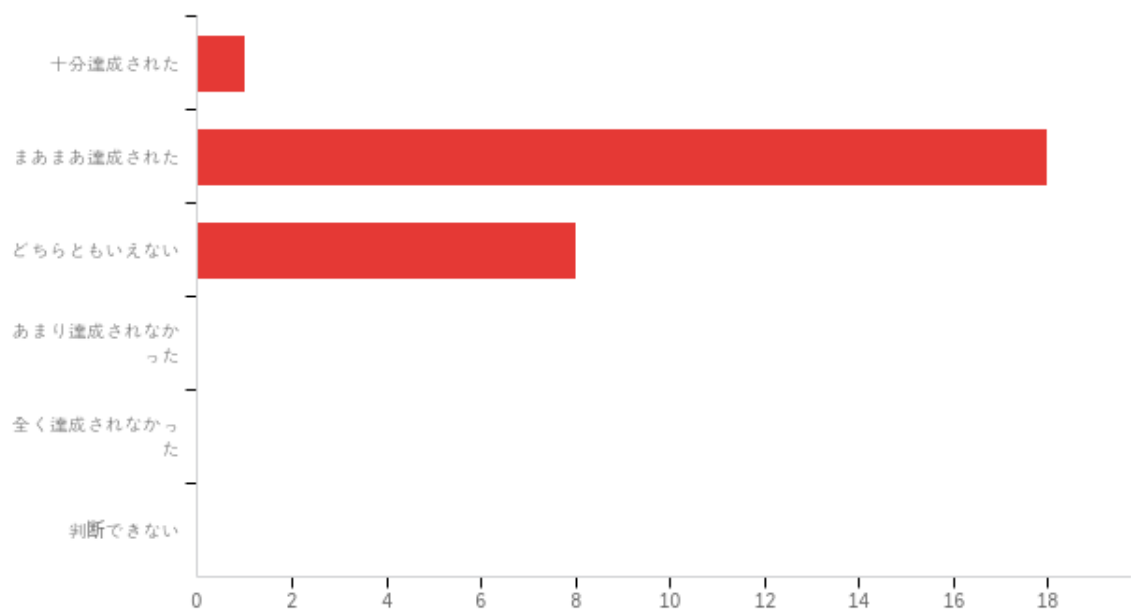


Q15 生徒の反応・課題・小テスト・アンケートから考えたとき、オンライン期間中における授業目標は達成されたと考えられますか。

専任教員

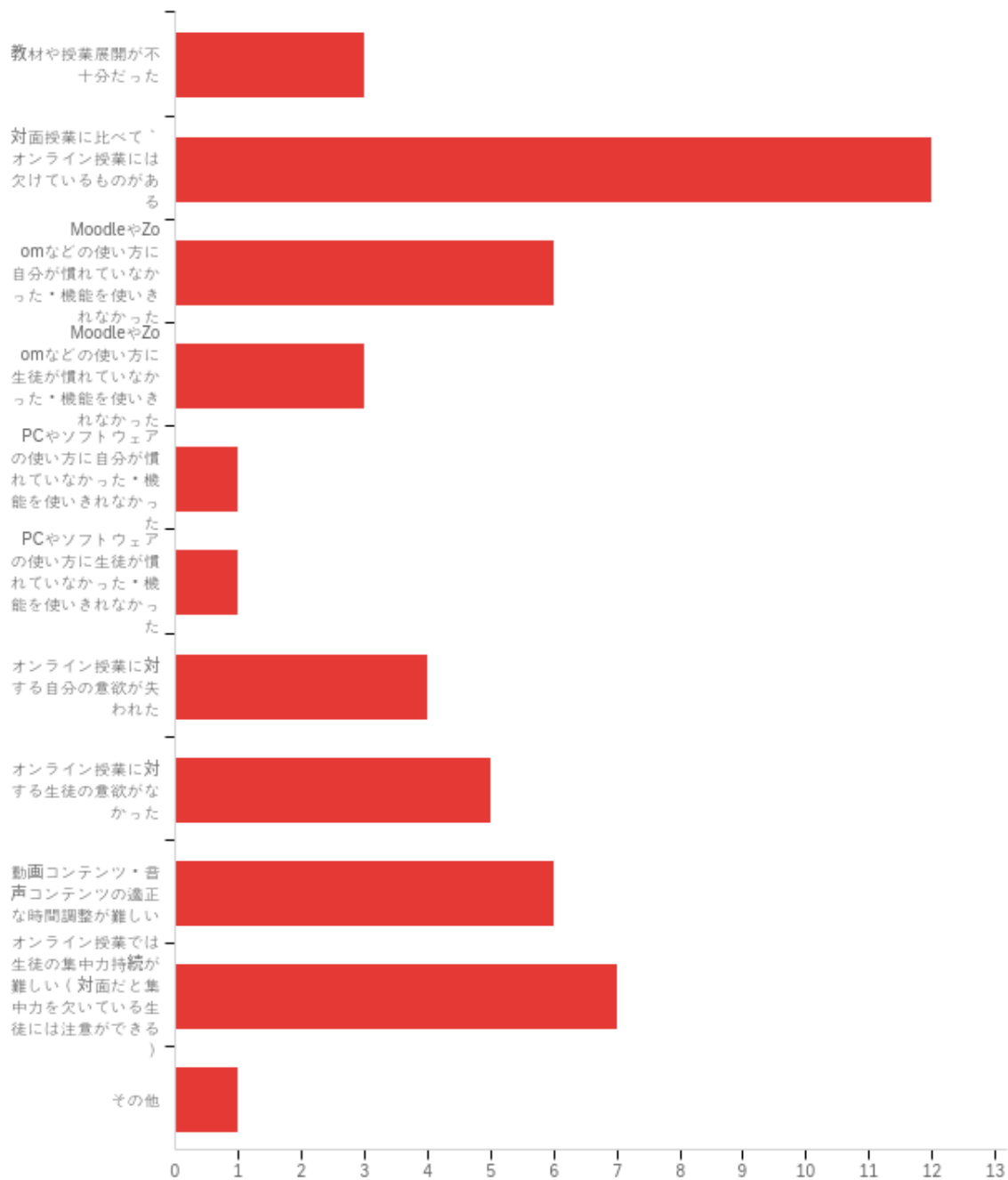


非常勤講師

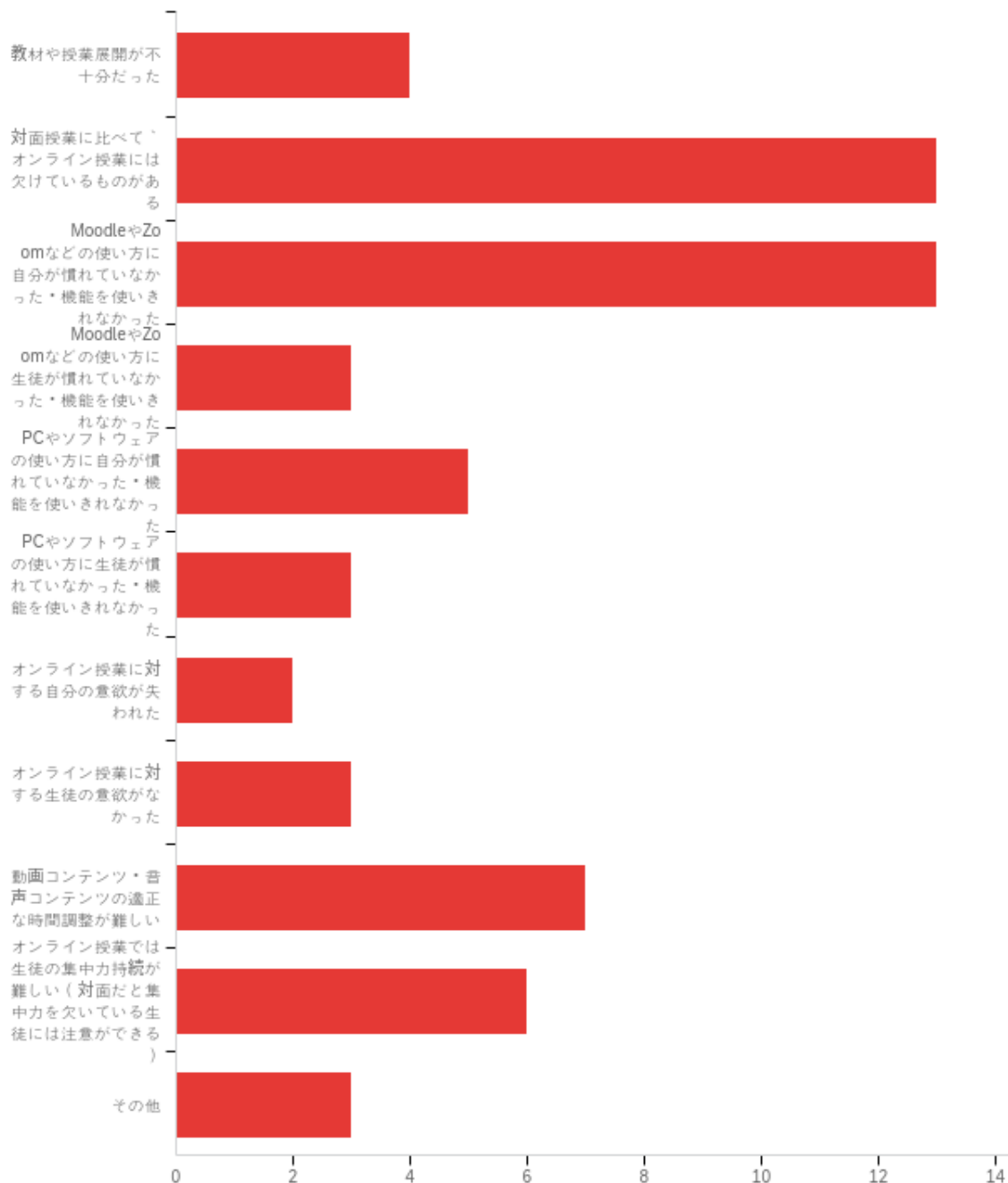


Q16 Q15で「十分達成された」と回答なさった以外の方に伺います。達成されなかった・達成されない部分があった場合、その理由はどこにあるでしょうか（複数回答可）。

専任教員



非常勤講師



0.8 今後に向けて

2020年のコロナ禍は世界中に未曾有の危機をもたらしたが、その中で培われた様々な成果を忘れてはならない。その大きなものの1つが「オンライン」であろう。

オンライン利用を余儀なくされたことが、例えばテレワークやオンライン授業など、私たちの日常生活の在り方を変えようとしている。しかし、その一方で、オンラインの良い点や対面のいい点を見直すきっかけにもなっている。今後は、対面授業を軸に、その上でいかに教育効果を上げるためにオンラインを活かすかがポイントになるだろう。また、同時に、オンラインは今までの学校間交流やシンポジウムの在り方の可能性も広げている。課外活動にもこの成果を活かすことが求められよう。

教育現場において、コロナ禍の混乱の中、この間に一人一人の生徒・教職員の経験において失われたものは得たものに比較してあまりにも大きく、これを取り戻すことはできない。そうであっても、学校として得たもの・失ったものを冷静に整理し、失ったものを可能な限り取り戻し、

得たものを今後活かす努力は必要である。「部活動の在り方」「働き方改革」「オンラインを導入することによる出張の整理」「授業改革」など多くの見直すべき点がコロナ禍によって洗い出されている形になっている。本校もこれらの点を整理し、学校改革に取り組む必要があることを改めて感じている。

1. 教育理念・目的・人材育成像

早稲田大学は早稲田大学教旨に示された3つの建学の理念、すなわち「学問の独立」「学問の活用」「模範国民の造就」に基づき、教育・研究を展開している。その上に、2000年に「21世紀の教育研究グランドデザイン」を発表し、08年には創立125周年を契機に「Waseda Next 125」を策定して「早稲田からWASEDAへ」をスローガンに定めて広く世界で活躍する人材の育成に努め、グローバルユニバーシティとして構築することを目指すこととした。さらに、創立150周年を展望した「Waseda Vision 150」を12年11月に策定し、「アジアのリーディングユニバーシティ」として世界に貢献する大学であり続けるためのビジョンを社会に公表し、目指す方向性を明らかにしている。

早稲田大学本庄高等学院（以下本庄学院と略）は早稲田大学創立100周年を記念して1982年に男子校として開校した。2007年に男女共学となり、2012年に現在の校舎に移転した。全国各地および世界各国から、将来早稲田大学を目指す意欲的な生徒を集め、自由と自立の校風の中「自ら学び、自ら問う」という教育方針のもとで「進取の精神」に満ちた活力ある生徒を育てることを教育の基本としてきた。

加えて、本学院も「Waseda Vision 150」に関連し、12年11月、「本庄高等学院の将来構想」を発表した。すなわち地域の特色を生かした「森に想い土に親しむ」教育をいっそう発展させた、教科横断型の教育・研究活動を通して、社会の各分野で活躍できるリーダーを育成することを目的としている。本学院は早稲田大学で一貫した教育体系の中に位置づけられ、卒業生全員が早稲田大学の各学部に進学すると規定されている。したがって本学院の目的は、早稲田大学教旨「Waseda Vision 150」、そして「本庄高等学院の将来構想」に基づいた教育・研究活動を行なうことである。生徒に対しては、知的関心を高め論理的な思考力、豊かな感性を育成し、さらに大学における専門的な学問の分野も模索させ、また大学での幅広い本格的な学問研究に必要な、基本的な学力・体力を養成することを目指している。その目的は本年度においても継承されている。

2. 教育活動

2.1 授業

※ コロナ禍における授業運営

コロナ禍の中、授業展開に際して、今までに経験したことのない苦労を強いられた。それは大きく2点に絞られる。

① オンラインでの授業展開の難しさ

これについては、0章で述べた。

② 対面・オンラインを問わず実技や実験が必要とされる科目の展開の難しさ

これについては、特に体育科・家庭科・芸術科が困難に直面した。以下に、それぞれの教科の対応について述べる。

・ 体育科

本年度のオンライン授業では、生徒に、自宅でも健康的な生活を送ることを意識してもらうように、体温、食事、運動等のセルフチェックシートを作成して毎日記録を行った。生徒の感想からも、チェックシートを毎日つけることで、運動の習慣化や健康面の変化に気づくことができ、生活習慣の乱れを未然に防ぐことに役立つことができた。また、自宅内や一人でも手軽に行える運動の動画を教員が作成して、積極的に運動を行うように促した。

一方、リアルタイム配信でクラスの生徒全員で運動を行うことも検討したが、座学授業のリアルタイム配信と異なり、運動する姿を全身映すための部屋の広さの問題やマンションなどでの近隣住民（上下左右の階）への配慮から、一律の運動を推奨する

ことが難しかった。

屋外での運動も、都内など人の多い地域に住む生徒がいることから、具体的な屋外でのランニング等の課題を出すことは難しかった。

このようなことから、オンライン授業期間中の運動機会は、生徒の自主性に任せていたことが、今後に向けての反省点である。オンライン期間の数カ月間、一人で運動することはとても難しかったという意見も多くみられたので、より一層の工夫が必要であると感じられた。

通常授業や分散登校では、感染予防の観点から、授業前後の消毒や手洗いうがいを徹底した。実施種目は、テニス、卓球、バドミントンの個人競技や、接触の少ないバレーボール、サッカーなどで、接触を伴うバスケットボール、ハンドボール、ラグビーなどの種目は実施しなかった。各種目とも、距離を取って行える基礎練習を行い、試合を中心に授業を展開した。

オンライン授業で運動機会が減っていたため、授業では楽しそうに活動していた。久しぶりに運動を行う生徒の中には、体力の低下や足が攣る様子も見られたので、運動強度の設定に注意しながらの活動となった。

また、運動時にもマスクの着用を推奨していたが、サッカーなど運動強度が上がる種目では息苦しさから、マスクを外す場面も多くみられ、感染予防と実技授業の両立の難しさを実感した。

- ・ 家庭科

家庭科では、調理実習の実施に苦勞した。3年生の選択食文化は少人数授業（20名）であったため、パーティションを立てて調理・試食をさせることができた。それでも調理の行程を例年の半分程度にする必要があった。

1年生の1年生の必修授業は予定していた実習5回のうち1回しか実施できなかった。実習以外にも、特に家族・家庭生活に関する分野の学びでは生徒たちのディスカッションの実施に苦勞した。

家庭科の学びを深めるためには多様な価値観に触れることが欠かせない。コロナ禍で、教科書の内容を一人で学んで知識を積み上げることに偏った学びとなったことを反省している。

- ・ 芸術科

芸術科の科目は実技教科の一つであり、特に対面による教員と生徒・生徒同士のやり取りが行われることで、授業はより活発になり充実した内容となる。しかしながら2020年度は新型コロナ禍における授業ということで、年間の約半数の授業がオンラインでの授業形態となった。

以下は、今年度のコロナ禍において行った授業内容（音楽Ⅰ）である。

- ① オンラインでの歌唱指導

30分程度の歌唱指導の動画（全15回）を作成し、生徒にオンデマンド配信を行った。ただ歌うだけではなく、音楽用語の細かな説明や楽曲にまつわるエピソード解説、更にはクイズなども導入することで、生徒たちが幅広い教養を身に付けることを目的とした。取り上げた教材は、音楽の教科書に掲載されている日本歌曲や外国語歌曲の他、国内外の歌謡曲も取り入れた。授業後に行ったアンケートでは、「家族全員で歌った」や「歌うことでリフレッシュになった」という意見が数多く寄せられた。

- ② オンラインでの音楽教養講座

「ドレミの不思議」と題した講座（全7回）では、音楽において当たり前のように扱われる単語や言い回しについて、そのルーツを探りながら学習する動画（各回約30分）を作成し、生徒にオンデマンド配信を行った。「音階の基礎知識」と題した講座（全8回）では、音楽を形作る「音階」や「調」について、音楽史や名曲の鑑賞と絡めながら学習する動画（各回約30分）を作成し、生徒にオンデマンド配信

を行った。内容としては専門的な知識も含まれたため、授業後に行ったアンケートには、内容について難しく感じた生徒も多かったようだが、音楽と他教科（数学、歴史、地理、語学）がたくさんリンクしたことに驚き、魅力を感じた生徒が圧倒的に多く、初学者でも楽しめたという声が寄せられた。

③ 対面での授業内容 その1

旋律譜に記されるアルファベット（コード記号）の解説の仕方を細かくレクチャーした上で、グループ活動・演奏発表を行った。各班で選んだ楽曲の一部分を、旋律担当・伴奏担当に分かれて、オリジナルの合奏を行った。なお、上記の授業を円滑に進めるために、1クラス（41名）分のキーボードを用意した。今年度の学習で唯一、発表まで行えた授業内容であり、年度末に行った授業アンケートでは、この学習に対する生徒たちの充実度の高さがうかがえた。特に、班の分け方は、くじ引きによる男女混合の組み合わせだったため、そのことがクラス内の交流を図る良い機会になったことも、多く触れられていた。

④ 対面での授業内容 その2

三学期は、個人・グループによる演奏発表を予定していたが、新型コロナの感染拡大に伴い、中止となった。二月に一週間の対面授業期間が設けられたため、稲稜ホールにおいてミュージカル映画「雨に唄えば」の鑑賞を行った。気軽に楽しめる作品は、コロナ禍で鬱屈した生徒たちの良いリフレッシュになったようである。

苦勞した点は、オンデマンド配信の授業に際しては、すべてにおいてパワーポイントを用いたが、その資料作りに非常に多くの時間を要したことだった。特に、対面では声やピアノの音ですぐ伝えられることを、オンライン上では文章や画面で補うことになるため、その点はかなり気を遣った。

結果として生徒には満足してもらえたようなので、音楽のオンライン授業での可能性を大きく見出した一年となった。

必修科目・選択科目

（ア）カリキュラム

カリキュラムは1年次から3年次まで、各年度32単位構成で3ヵ年96単位となっている。

- ・ 1 年次：芸術科目の音楽履修クラスと美術履修クラスに分け、その他の必修科目は共通に履修する。
- ・ 2 年次：ゆるやかな文・理選択分けをしている。文系は古典（2単位）を選択し、理系は物理（1単位）および科学課題研究（1単位）を履修する。また、数学3単位は、文系は経済や商学部で必須とされている内容を、理系では理工学部での学習の基礎となる内容を扱っている。
- ・ 3 年次：32単位の構成は、理文共通科目（15単位）、必修選択科目（12単位）、自由選択科目（2単位）、総合的な学習の時間（2単位）、HR（1単位）となっている。文系と理系では必修選択について科目および科目数が異なる。文系は66科目12単位、理系は4科目12単位である。また「総合的な学習の時間」は、キャンパスに素材を求めた半期ごとの輪講形式の「大久保山学」（1単位）と、「卒業論文指導」及び「修学旅行事前学習指導」を行う「課題研究」に配分している。

（イ）必修科目

必修科目の授業計画は、毎年、前年度の生徒の授業評価結果の分析・検討に基づいて作成している。また、すべての教科において年度初めにシラバスを作成し、それに沿って授業を展開している。

第1学年では主に、基礎学力重視の観点から、中学校の内容との連続性を意識した展開を、第2学年では学力の充実・発展の観点から構成を考えている。第3学年では大学での教育との連携を意図して、各科目の特徴を捉えて授業を行なっている。

授業の基本方針は、わかりやすい授業、探究や思考力、判断力、表現力を高め、生徒が主体的に取り組めるような授業形態、大学への架け橋となるような専門的な内容を盛り込んだ授業、社

会との関わりを意識した授業を心がけている。

具体的には理数教科で学部教育の基礎となる学力の強化をはかるべく、一定の基準に達しない生徒への追試や補習授業を行なった。さらに語学や人文社会科学系の科目では、アクティブ・ラーニングを取り入れた授業も多く、またプレゼンテーション技術の習得や論文執筆指導を含む授業展開も多くなされた。

最近では、反転授業・ジグゾー法などの新しい授業形態を取り入れたもの、複数科目のコラボレーション授業など、新しい授業形態への取り組みも多い。また、各科目の節々で、本学院の特色である論文教育を推進するアカデミックリテラシーを意識した授業展開がされている。

(ウ) 選択科目

- ・ 2年次：どの分野に進む生徒にも、数学 及び数学 B は必修としている。ただ、理工系で必要とされる内容と経済や商学部などで必要とされる内容は異なる部分もあるため、数学に関しては、文系用と理系用を用意し、選択させている。また、文系には古典を、理系には物理・科学課題研究を用意し、考えることと 実際に体験することを軸に据えた授業を展開している。
- ・ 3年次：本学院のカリキュラムの最大の特徴として、3年生に豊富かつ多様な選択科目を履修させていることが挙げられる。音楽や美術、第2外国語（フランス語、スペイン語、中国、朝鮮語等）も含む選択科目は、必修と自由を併せて合計7科目14単位を選択することが規定となっている。具体的な内容としては、学部の専門科目の導入的な性格を持つもの、時代に必要とされる力を意識したもの、早稲田の一員ということを認識させるものが設置されている。

(エ) 英語能力試験

4月に GTEC Advanced (3 技能)、9月に TOEFL ITP または、TOEFL Junior、11月に3年生のみ GTEC4 技能試験を実施した。これは、学院生が自らの英語能力を客観的に知るためと、いくつかの学部で英語力が進学の際の資格要件として課されているということ、どの学部からも調査書と共に英語の4技能外部テストスコアの提出を求められていることに対応するためでもある。

(オ) 大久保山学

「大久保山学」設置の趣旨は、キャンパス環境を利用した学習教育プログラムや、学際的かつ総合的な視点から学習に取り組むことで、断片的な知識の集積ではなく、総合的な理解力や判断力を養成することを狙いとしている。本学院を取り巻く自然環境や歴史的遺産を、生きた教材としてカリキュラムに活用するという考え方がその基となっている。

本学院は本庄市の浅見山丘陵に位置し、面積は70数ha、長辺は1.5kmに及ぶ。丘陵の一部の字名は「大久保山」であり、通称的に丘陵地帯全体を大久保山と呼んでいる。ここからは埴輪や土器などが大量に出土しており、丘陵周辺の平地には条里制の遺構跡も発見されるなど、山全体が歴史的遺産と位置づけられる。

またオオタカをはじめ、多くの野生生物が棲息し、多様な樹木や植物が繁茂している。さらに本庄キャンパスのわきには川が流れ、科学関連プログラムの水質・生物調査の対象になり、地域との交流の舞台にもなっている。

本学院は「将来構想」（2012年年11月公開）の中で「大久保山学」を教育の特色の一つとして位置づけ、具体的にどのような教育プログラムが展開できるかについて検討を開始した。そして13年の「Waseda Vision 150」の中で、「地域の特色を活かした『森に想い土に親しむ』教育を一層発展させた『大久保山学』をテーマに、科目横断型の教育・研究を通じて、社会の各分野で活躍できるリーダーを育成する」と基本理念を定め、その実現を図るための教育プログラムを「大久保山学」としたのである。

授業は木曜2時限目に8講座を同時開講とし、前期と後期で異なった講座を履修する Semester 一制とした。生徒9通りの組み合わせパターンのひとつを選択することとしている。以下は2020年度の大久保山学の一覧である（左：前期科目／右：後期科目）。

1. 「大久保山に住む人ってどんな人たち？」／「身近な現象の自然科学」
2. 「本庄キャンパスを Web で世界へ」／「不確実性下における意思決定入門」
3. 「大久保山の数理科学」／「Silent Spring を通して考える環境破壊と大久保山」

4. 「Silent Spring を通して考える環境破壊と大久保山」／「大久保山に住む人ってどんな人たち？」
5. 「『平家物語』から見る武蔵武士」／「大久保山の環境と生物多様性」
6. 「『平家物語』から見る武蔵武士」／「本庄キャンパスを Web で世界へ」
7. 「大久保山の環境と生物多様性」／「本庄市周辺の歴史と文学」
8. 「大久保山の数理科学」／「身近な環境の自然科学」
9. 「本庄市周辺の歴史と文学」／大久保山の環境と生物多様性」

（カ）課題探究

第3学年の木曜3限に総合的な学習の時間「課題探究」を設定している。この科目は第3学年の組主任8名で担当し、年間20回の授業を修学旅行関連学習に約10回、卒業論文指導に約10回を年間計画で配置し実施している。同時に、学年集会（ガイダンス・学院長による修学旅行関連講話）や学年行事（教育実習生によるパネルディスカッション）との関係も図っている。

修学旅行関連学習では、4月の段階でCOVID-19のために海外への修学旅行を中止したため、事前学習の全体講義は国内日帰り旅行に変更し行った（ガイダンス、班決め・実行委員決め、しおり作り、交流時のグループ分けと発表準備）。国内の日帰り旅行に変更するには、バスの車内環境や、行動指針などを策定する必要があったが、生徒が中心になって、国内旅行の意義を考え、コース策定から当日の行動まで綿密に計画し実行した。この参加者は、生徒の2/3程度と少なかったが、行かなかった生徒に関しては、卒業論文の執筆作業を自宅で行なわせた。

次に、卒業論文指導については、早稲田大学にあるGEC(Global Education Center) ライティング・センターによる講義をZOOMで行なった。同センターは、アカデミック・ライティング（学術的文章を書く技術）ルールを踏まえ、分野を問わず早稲田大学の学生・教員の「書く」ことをサポートしている。本学院の多くの生徒が学部進学後も同センターの指導を受けることになるので、高大連携・高大一貫教育の観点からの学習効果が高いと考えられる。

このように木曜3時限目を総合学習に振り替えたのは2017年度からであり、今年度が4年目である。第3学年の教育活動の核となる修学旅行と卒業論文について、授業時間での指導・準備が行なえたことの意義は大きい。この科目の設置によって、放課後に生徒招集の必要が多かった年度と比べ、生徒・教員の準備活動に余裕と深みをもたらした。

（キ）卒業論文

卒業論文制度は開校以来実施している本庄学院教育の特色の1つである。卒業論文の提出が学部進学必要条件となっている。

前述したように、2017年度より導入した、早稲田大学ライティング・センターによる学年単位での卒業論文の一斉指導「卒業論文を書くための基礎講座」を、今年度もZOOMで行った。3年次の「課題研究・総合学習の時間」（週1コマ・50分）のうち年間3時間をこの講義に充てた。ライティング・センターという学院外の箇所に指導を依頼した理由の一つには、進学先が文・理・学際と分野を異にした第3学年の生徒を、一斉に指導する必要があったからである。講義の時期や内容は、生徒の卒論制作の進度などに鑑み、同センターと相談の上で決定した。以下に概要を示す。

対象：第3学年生徒全員（総合的な学習の時間として）

担当：進路指導委員会および第3学年団

- ・ 第2回 7月30日（木）3限「卒業論文を書くための基礎講座～学術論文における引用の作法～」

講師：嶋田大海助手（グローバルエデュケーションセンター）

会場：食堂・稲稜ホール・食堂・図書館2階にてオンデマンド形式(Moodleに置かれた事前に録画した動画を視聴)

- ・ 第3回 9月10日（木）「卒業論文を書くための基礎講座～文章を推敲し思考を整理するー卒業論文業論文完成に向けてー」

講師：太田裕子准教授（グローバルエデュケーションセンター）

会場：分散登校のため、通学した生徒はHR教室にてオンデマンド形式（Moodleに置かれた事前に録画した動画を視聴）。自宅学習の生徒は各自でMoodle上の動画を視聴する。

対象：第2学年生徒全員（LHRの特別講義として）

担当：進路指導委員会

- ・ 第1回 9月12日（木）4限「卒業論文への取り組みを始めよう～テーマから問いへ、問いから研究デザインへ～」

講師：太田裕子准教授（グローバルエデュケーションセンター）

会場：稲稜ホール

対象学年には講義の実施後にアンケートを行ったが、その結果から第3学年生徒においても第2学年生徒においても、非常に高い教育効果を生んだことが伺えた。卒業論文の制作過程において、テーマを見直したり深めたりする作業、完成までのイメージを計画的に形作る作業、剽窃・改ざんなどのテーマを見直したり深めたりする作業など、具体的かつ実践的な方法を教授されたことによって、生徒がそれまでに抱えていた漠然とした不安が執筆への意欲へと、大きく変化したように見受けられた。

次年度以降も、早稲田大学ライティング・センターとの連携を密に保ちながら、学年単位での卒業論文の一斉指導の在り方を模索し、ポストSSH・SGHにおいて、より一層の教育効果を挙げていきたい。

早稲田大学ライティング・センターへの講義依頼を継続することで、卒業論文指導における高大接続の可能性を僅かながらつけることができた。しかし、大学・大学院進学後により充実した研究活動を行うためには、卒業論文で扱った研究内容を高等教育の場に引き継げるような指導体制が望ましい。今後、本校生徒が、本校生徒が附属出身者としてのメリットやアドバンテージをより良い形で享受できるような教育デザインを考え、設計していくことが課題である。

卒論報告会

例年、2月中旬の水曜日に、卒業論文に取り組むことになる第2学年生徒に向けて、紹介したい卒業論文3本に慶應湘南藤沢の優秀自由研究論文1本を加え、稲稜ホールで研究内容と作成過程を紹介し、質疑応答を行う、卒論報告会を開催している。しかし、今年度はこの期間がオンライン授業となったため、対面での実施ができなかった。

しかし、先輩の成果を後輩に伝えることは必要であり、オンデマンドで配信を行うこととした。オンラインであれば時間やキャパシティの制約にとらわれることがないため、全学年に対して、14名の優秀作品に関する内容を配信することとした。以下は、配信内容である。

- 1 「高等学校における国際バカロレアプログラムの受け入れ実態」
- 2 「棒消しゲームの排他的論理和を利用した証明」
- 3 「サイバーフィジカルシステムによる陸上競技の解析」
- 4 「ウイルスダイナミクスの数理モデル」
- 5 「石鹼における脂肪酸の重要性～自作石鹼を用いた検証～」
- 6 「新学習要領に基づく検定教科書の分析と提案」
- 7 「観光情報発信がもたらす観光公害の可能性～京都市錦市場を事例として～」
- 8 「微生物燃料電池の製作」（2020年度Japan Science & Engineering Challenge入選、電気学会U-21奨励賞）
- 9 「スーパー戦隊シリーズの実態～『不変の要素』と『変化のしかた』から考察するシリーズ展開の特徴～」
- 10 「国際交流の可能性と効果的な課外活動の提案 2020年度の見解」
- 11 「Pepperと赤外線アレイモジュールを用いた体温測定システムの構築と評価」（2020年度Japan Science & Engineering Challenge入選）
- 12 「現代日本の吹奏楽におけるファゴットの存在意義」（2020年度早稲田大学本庄高等学院賞受賞）
- 13 「日本における子どもの貧困問題～私たち高校生にできること～」
- 14 「アマチュアオーケストラの存在意義」
- 15 「敵対的生成ネットワークによる配色の生成」—AIは心に届く配色を作れるか—（2020年度日本物理学会Jrセッション奨励賞受賞）

2.2 課外講義

(ア) キャリア教育

本校では、生徒達の進路設計とそれを踏まえたミスマッチのない学部選択に活かすことを考え、2018年度よりキャリア教育に取り組んでいる。

具体的には、年6度程度、月1回を目安に、土曜日の放課後に本校のOB/OGを招へいし、自身の高校時代・大学時代・そして現在の仕事の内容について話してもらうという内容である。今年度は、オンライン授業期間中にはZoomで実施した。対面に比べて、部活動等の影響を受けず気楽に参加できるためか、Zoomの方が大幅に参加者が多かった。

6月13日(土) (Zoom)	クルマが作る私たちの生活の未来	トヨタ自動車株式会社 辰巳 紗希穂氏
	政府系銀行と民間系銀行	日本政策投資銀行 平 菜桜子氏
7月4日(土) (Zoom)	外交の場で働く魅力	外務省 反町将之氏
	シンクタンクとは?	株式会社三菱総合研究所 細田幸佑氏
9月19日(土) (対面)	早稲田で切り開く未来	都内大学院国際政治学専攻 木暮美季氏
10月10日(土) (対面、講師はZoomで参加)	アナウンサーという仕事	日本テレビ放送網株式会社 市来 玲奈氏
12月5日(土) (対面)	弁護士という仕事	早稲田の杜法律事務所 金子直樹氏
2月6日(土) (Zoom)	美術館・博物館で働くために (学芸員キュレーターの仕事)	うらわ美術館 前田伽南氏
		Canada Carleton University 大学院在学 豊田 遙氏(カナダから参加)

キャリアデザインウィーク

例年、9月2週の土曜日を使い、1日4名程度のOG/OGを招へいし、集中的にキャリアデザイン講座を行っている。今年度は、コロナ禍による授業進行の遅れから、10月17日(土)に行った。生徒の混乱を避けるため、事前登録の上、1教室で行った。業種はコンサルティングと国家公務員である。

- ・ 農林水産省生産局農産部技術普及及生産資材対策室・計画認定係(農林水産事務官) 中井まどか氏
- ・ デロイト トーマツ コンサルティング合同会社 ライフサイエンスアンドヘルスケア・コンサルタント川井沙菜氏

(イ) 稲稜祭

本年度は、新型コロナウイルス感染症のため、オンラインによる開催となった。開催方法は事前に収録した動画とライブパフォーマンスを稲稜ホールでミックスし、学内の放送設備を用いて各教室へライブ配信する形で実施した。当日の登校は任意とし、登校しない場合はアップロードされたオンデマンド動画を自宅で閲覧する形とした。

参加団体は各クラス・公認団体・有志団体の3種類とし、各クラス・公認団体はオンデマンド動画による発表、公認団体はオンデマンド動画とライブパフォーマンスのいずれかを選択して発表した。またオンデマンド動画のうち、一部のコンテンツは学外からでも視聴が可能な形とし、学内・学外から約一週間程度稲稜祭コンテンツにアクセス可能な状態とした。

(ウ) 体育祭

例年6月初旬に行っているが、本年度は新型コロナウイルス感染症予防のため、中止となった。

（エ）球技大会

10月22日（木）に第3学年で実施した。午前中は、サッカー（男子）、ドッジボール（女子）、バスケットボール（男女）を行い、午後は、中止となった体育祭の代わりに、綱引きやリレーをクラス対抗で行った。どの種目も盛り上がりを見せ、数少ない今年度の学校行事として、高校生活の思い出の時間となる貴重な行事であった。

10月23日（金）に第1・2学年で実施した。種目は、男子がソフトボールとサッカー、女子がバレーボールを行なった。残念ながら途中で雨が降ってきたため、屋外種目のサッカーとソフトボールは途中までで中断し、女子のバレーボールのみ、全試合を終えることができた。白熱した試合展開が多く、初めてのクラス対抗行事であったためクラスの団結力が見られた有意義な時間であった。

（オ）マラソン大会

例年12月中旬の終業式の日を実施している。本年度は、新型コロナウイルス感染症予防のため、中止となった。

（カ）人権教育

例年10月に実施しているが、今年度は中止となった。

（キ）芸術鑑賞教室

例年10月に実施しているが、本年度は新型コロナウイルス感染症予防のため、中止となった。

（ク）早慶野球戦観戦

例年6月初頭春の六大学野球リーグ最終戦である早慶戦の応援に第1学年が参加する。早稲田イズムを感じる貴重な機会であるが、今年度は春の六大学野球が中止になり、実施がかなわなかった。

（ケ）秋の学年行事

10月22日（木）、本年度4月に入学式の無かった第一学年が大隈講堂に現地集合した。密回避のため座席間隔は十分に取り、一部は大隈小講堂も使用して、大学史の講義と来年度コース選択説明を行事を聴講する行事を行った。講義後は大講堂の正面でクラス別に記念撮影を行い、散会となった。

（コ）健康教育

例年、各学年に健康教育講演を実施しているが、新型コロナウイルスの影響により、対面での講演は実現できなかった。しかし、今年度は休校期間やオンライン授業期間が長く、メンタルに不調をきたす生徒が増加したため、例年と内容を変更し、主にメンタルヘルスについて、臨床心理士や精神科医師等の専門家に講演を依頼し、オンライン及びオンデマンドで実施した。

- ・ 第1学年：「こころの健康」、榎木啓二先生 5月21日（木）、Zoomによる
- ・ 第3学年：「コロナとメンタル」、瀧村剛先生 11月26日（木）、教室にて録画再生

（サ）交通安全等講話

例年、新1年生に対し、登下校時の交通安全、痴漢等性犯罪の回避、SNS等を使った犯罪を避けることを目的として、本庄警察署に講師派遣を依頼し、ガイダンス時に講義をしていただいている。今年度は休校期間により中止となった。

2.3 課外活動

（ア）生徒会活動

コロナ禍のため、部活動紹介・文化部合同発表会・生徒会予算折衝・生徒総会等は全てオンラインで実施した。またMoodleに各公認団体が活動内容をPRできる場所を設置し、新入生が興味を持った公認団体に直接連絡を取ることのできるようにした。

献血は実施を中止し、七高祭も中止となった。

学校説明会や稲稜祭で実施していた生徒会ブースはZoomを用いて実施した。
その他の行事は例年通りの内容を実施した。

(イ) 部活動

コロナ禍の中、部活動も大きな影響を受けた。

1 学期中の公式戦は全国一斉休校の混乱を受け、すべて中止となった。本校では6月29日の分散登校開始から、夏休み中、週の回数や下校時刻を早めるなどの制限付きで活動を開始した。宿泊を伴う合宿活動等は、現在に至るまで中止としている。8月以降、特に3年生に向けて、関東や全国につながらない形の県大会が実施された種目もあったが、3年生の中には、既にモチベーションが低下していること、学習に集中したいなどの理由から参加しない生徒も多かった。

運動部のみならず、文化部も影響を受けた。特にブラスバンドやグリー（合唱）は、県や文科省からの指導も強く、大きな制限を受けた。すべての部活動において、練習再開からしばらくの間は、消毒体制や練習メニュー、健康チェックなどの面において、過剰に神経質に対応せざるを得なかった。

9月の通常登校開始後は、部活動時間を通常に戻した。運動部では多くの種目で新人戦などの試合が観客等の制限の下、例年通り行われるようになったが、文化部ではオンラインにとどまったものも少なくなかった。

1月7日からの2度目の緊急事態宣言発出後、県の指針を受け、改めて部活動は回数や活動時間雄大な制限を受けた。本校は1月21日からオンライン授業となったため、これ以降3月9日まで部活動は休止となった。

県からの公立高校に対するガイドラインをベースに、本校のガイドラインをその都度検討し、臨時教諭会を開催して、それを確認することを繰り返した1年であった。

(ウ) 特別講演

5月25日に宇都宮大学国際学部助教の藤井広重先生によるオンライン特別講演「アフリカの多様性から考えるグローバルな社会と私たち～新型コロナウイルスに対してアフリカって本当に“脆弱”なの？」が行われた。藤井先生は、NGOや国際機関に勤務した後に内閣府の연구원として南スーダンやマリに滞在し、その後、国連のプログラムにて南アフリカ・ケープタウン大学の연구원を務められた。2017年から現職につかれ、国際法、国際人権論を専門としている。

講演では、日本からは地理的に遠く身近とは言えない存在であるアフリカについて、アフリカの危機や脆弱性について、大学や紛争地での経験をもとに具体的にお話をしてくださった。キャリア形成にもつながるような話題にも触れて頂き、講演後には生徒の質問にも答えて頂いた。

生徒たちの質問は国際機関の仕事からアフリカについて、新型コロナウイルス対策についてなど途切れることなく多岐にわたり、一つ一つの質問に丁寧に答えて頂いた。参加者は100人を超え、参加できなかった生徒へ後日録画対応をするほどに盛況で、閉塞的な社会情勢下で生徒たちが考える糧を求めていることを実感する催しとなった。

(エ) 科学教育課外プログラム

- ・ 学内講演数学科特別ガイダンス「2年生向け数学（と数学教育）の卒論って？」

7月27日放課後に、2年生が卒業論文のテーマを決めるための一助とするために、数学科が主体となって特別ガイダンスを行った。分散登校中ということもあり、このガイダンスの様子はZoomで同時中継され、Waseda Moodle上にもしばらく掲載した。また、2年生に限らず、1年生の参加も見受けられた。まず、数学にはどのような分野があるのか、本庄学院生が数学で卒論を書く・研究をするということはどのような活動をする事なのかの説明された。

- ・ 「これがサイエンスだ！」特別講義

本学院教員による特別講義「これがサイエンスだ！」を、以下の内容で実施した。今年度はすべてオンラインで行った。この講座は、毎年5回程度、生徒達に対して科学に興味を持つきっかけになることを目的に実施している。

「数学ソフトウェアGeoGebraの使い方講座」（数学科：太田洋平教諭）（4月25日）

「数学と双対性-射影幾何学と双対原理-」（数学科：太田洋平教諭）（4月28日）

「宇宙線を捕まえろ！」（物理科：大塚未来教諭）（5月7日）

「理系講師による学院生に向けた座談会」（情報科、数学科、理科非常勤講師有志）（6月20日）

「合同ゼータ関数のリーマン予想」（数学科：根本裕介、3/18(木)）

「数学科講師陣の研究紹介 ～応用数学編～」 （数学科：佐藤慧 堀綾子、3月30日(火)）

（オ）河川研究班の活動

市内河川環境保護と環境教育普及を目的に活動を継続している河川研究班（川研）であるが、今年度はコロナ禍の中、1学期は全く活動ができなかった。春に予定されていた藤田小との合同河川調査は9月に延期された。しかし、7月末からの第二波により、中止になり再度11月に延期され、これは実施できた。

例年は春秋2回の合同河川調査のほか、年8回の5・6年生児童に対する環境・科学に関する総合学習授業の講師をしているが、今年度はほとんど実施できなかった。

今年度の川研の活動は中谷財団の助成を受けて行っている。

- ・ 藤田小との合同河川調査に向けた、河川調査研修（8月16日）
9月の合同河川調査に向けて、小学生に対して「たも網」の使い方を教えと安全管理ができるように、小山川で河川調査研修を行った。
- ・ 合同河川調査（11月4日）
ようやく合同河川調査を行うことができた。例年だと小山川と元小山川で実施し、両河川を比べるのだが、小山川のポイントは昨年の台風19号で破損を受けており、危険と判断し、今年度は元小山川のみで行うこととなった。4班に分かれ、学院生は藤田小5・6年生に指導と安全管理を行った。
- ・ 事後授業（11月11日）
前週の調査でわかったことをこの日、班毎に児童が発表した。それを受け、学院生が調査における留意点「1つのデータから判断しないこと」「理由については、決めてかからないで、すべての可能性を探ること」「多くのデータを長い時間かけて集めることにより、傾向や特徴がわかってくること」を伝えた。その後、中谷財団の助成で購入した実体顕微鏡で河川中のプランクトンを確認し、目に見えない生物も川に住んでいることと食物連鎖について理解した。

2.4 国内外交流・研修

（ア）修学旅行

当初は、北京・台湾・韓国の3コースでの実施を計画していた。しかし、新型コロナウイルスの影響から、2020年2月に北京コースは沖縄コースに振り替えをし、4月の段階で海外での実施はとりやめ、国内（沖縄2コース、九州2コース）への振り替えをした。その後、文部科学省の通達をもとに、8月の下旬まで実施の可否の判断を待つことを基本方針とした。8月の段階で旅行社担当者より現地での感染対策の状況を伺い、その上で、感染対策等の難しさから修学旅行の中止を決定した。

修学旅行期間中の行事は10月19日（月）～21日（水）は通常授業、22日（木）は球技大会、23日（金）は日帰り遠足とした。日帰り遠足では感染対策を徹底することの指導を重点的に行った。一方で、生徒の感染不安による参加の見合わせを認めることとしたが、その数が予想よりもはるかに多かった。当時の情勢もあるが、案内が間際になったこと、行事としての指導がしきれなかった点が原因とみられ、反省点として挙げられる。遠足実施の際に、感染対策、感染の疑いがある場合の対処法を時間をかけて議論した。現システムの中では手立てする方法がかなり限られるということが問題点として浮かび上がったといえる。

（イ）海外からの訪問交流

例年、タイ、シンガポール、台湾の姉妹校の訪問を受けているが、今年度はすべて中止となった。

（ウ）留学

例年実施している韓国 Hana Academy Seoul との交換留学は、中止となった。

AFS のベトナムからの留学生グエン・ヤーギーさんを当初5月より受け入れる予定であった

が、コロナ禍の中、大幅に延期され11月14日に来日した。その後寮生活を送りながら1年生のクラスに入り、順調な留学生活を送っていたが、1月21日からのオンライン授業によりそれもできなくなった。臨時便が確保でき、3月10日に急遽帰国となった。

学校生活も十分に送ることができず、日本の文物の見学もできなかった。本当に可愛そうなことである。

(エ) 海外交流プログラム

- ・ ミニシンポジウム「国際交流へのいざない」(4月30日)
2020年4月当初の時点で、この年の国際交流は壊滅的であろうと予想された。しかし、本校に国際交流を求めて入学した生徒も多いこと、また未経験の新入生にも国際交流の良さを伝え、モチベーションを維持してもらいたいと考え、このイベントを企画した。立命館大学大学院教職研究科准教授田中博先生による基調講演「国際交流へのいざない」の後、清真学園十文字秀行先生・本庄学院OG小川いぶきさんをパネラーに加え、パネルディスカッションを行った。120名の学院生が参加し、質疑応答も盛り上がった。
- ・ Epsom Girls Grammar Schoolとのミニ交流会(9月23日)
ニュージーランドの私立女子校であるEpsom Girls Grammar Schoolは、今後の姉妹校締結を検討している学校である。本学院のESS部によるオンライン交流会が開催され、お互いの学校生活に関するプレゼンテーションなどを行った。
- ・ ハナ国際シンポジウム2020 Hana 11th International Symposium
夏休みに開催が予定されていた韓国の交流校Hana Academy Seoul主催のハナ国際シンポジウムは一時中止になった。しかし、生徒や経験者が立ち上がり、オンライン開催に向けた協議が始まった。そして、例年よりも少し遅れた時期に開催が実現した。
- ・ Japan Super Science Fair (JSSF) 2020
JSSFは立命館高校が主催する、世界最大規模の国際高校生科学シンポジウムである。本庄学院は2003年からずっと参加している。今年度はコロナ禍の中、やむを得ずオンライン開催となり、11月1日(日)7日8日15日に、一日3時間程度の時間で実施することとなった。世界中の学校が参加しているため、時差を考え、アジア・中東区域までのAゾーンとヨーロッパ・アメリカ区域のBゾーンに分かれて実施し、7日8日の研究発表のみ、どちらのゾーンの参加者も視聴できるよう、発表を2回行うという、配慮を行った。本庄学院からは研究発表「Effect s of Ethinyl Estradiol (EE2) on the male and female ratio of small freshwater shrimp, “Paratya compressa”」を行い、動画およびZoomで研究発表「Analysis and Simulate absorbed dose distribution by irradiating different types of radiation to Radiochromic Dosimeter」を行った。
- ・ Asia Academic and Cultural Sessions (A`ACS) 2020実施(タイMahidol Wittayanusorn School(MWIT)、シンガポールNational Junior College(NJC)、愛知県立半田高校、早稲田本庄の4校間国際シンポジウム)
本年度はオンラインを含め、国際交流プログラムがほとんど実施できていない。例年相互交流を行っているMWIT、NJCおよび、MWITと交流のある愛知県立半田高校の4校の教員が相談し、1月にシンポジウムをオンラインで実施することとした。通常のシンポジウムは教員がコーディネートし、参加生徒を募るのが一般的だが、このイベントではなるべく関わる生徒を多くし、達成感を得られるようにと考え、計画からすべて4校の生徒の委員会にさせたことが特徴である。ホスト校は国内2校が努めた。MWIT、NJCは世界的に有名な科学教育校であり、半田高校はSSH校であるが、今回は関わる生徒を多くするために、学校紹介、地域文化紹介も含め、研究発表も理文問わず幅広く参加できるようにしたいと考えた。1月24日(日)10:00~13:00、30日(土)14:00~17:00にZoomとSlackを用いて実施した。
- ・ 2回の留学説明会の開催
留学などとても考えられない状況ではあるが、そのような状況であるからこそあえて、留学の意味を考えてほしい、また早稲田大学の取り組みについて考えてほしいと思い、以下2つの説明会を大学国際部との連携の下、実施した。
3月19日(金)19時~本庄高等学院生徒、保護者を対象に、早稲田大学国際部による留学説明会を開催した。Zoom Webinarを利用しての開催で、120名以上の生徒および保護者が参加した。今回の説明会では、本学国際部国際課担当職員から、早稲田大学における留学制度の紹

介、この一年間のコロナ禍での派遣留学の状況、本学の対応や、新たに実施されたオンラインプログラム等についてご説明いただいた。オンラインによる留学先授業の事前履修、オンライン国際交流や世界中の大学生とテーマスタディを共同受講する取り組みなど、このコロナ禍で発展した新しいカタチの国際交流・学びへの取り組みが紹介された。

さかのぼること6月27日には「留学のススメ」をZoomで実施した。これまで本学院の保護者会開催時に保護者を対象に開催したことはあったが、今回は対象を生徒・保護者に広げオンラインで開催した。土曜の午後、ということもあり、合計180名ほどの保護者・生徒にご参加いただくことができ、関心の高さを改めて感じた。今回の講座では、早稲田大学国際課担当職員から「留学のススメ」のレクチャーののち、東京にある本学と包括的協定を結ぶEducation New Zealandのご担当者よりニュージーランドの国の事情、教育・留学等の制度をご紹介いただいた。また最後には、ニュージーランド（オークランドの高校）に留学中の本学系属高校生と結び、現地の様子の報告、質疑応答など、オンラインならではの構成で行われた。とくに留学中の生徒に対しては、ZOOMのチャット機能を活用した本学院生徒から「留学の動機は？」「留学前の英語力は？」「留学前にやっておいた方がいい準備は？」「留学開始後、いつから、どんなきっかけで英語が聞き取れるようになったか？」「英語力以外に身についたと思うチカラは？」などといった質問があり、生徒たちは活きた情報を得ることができた。

2.5 高大一貫教育

(ア) 学部説明会

本年度はコロナ禍により例年行っているような大学キャンパスでの対面による学部集中説明会は感染拡大防止の観点から行わず、オンラインでの実施となった。以下のような形で行われた。

- ・ 6月13日（土）13:50－14:10 教育学部（zoomリアルタイム配信）
- ・ 17日（水）13:50－14:20 理工三学部（30分）（zoomリアルタイム配信）
- ・ 18日（木）12:20－12:40 法学部（zoomリアルタイム配信）
- ・ 20日（土）13:50－14:10 国際教養（zoomリアルタイム配信）
- ・ 24日（水）13:50－14:10 社会科学部（zoomリアルタイム配信）
- ・ 14:20－14:40 政治経済学部（zoomリアルタイム配信）
- ・ 27日（土）13:50－14:20 文化構想学部、文学部（30分）（zoomリアルタイム配信）
- ・ 10月22日（木）10:15～10:45 スポーツ科学部説明（対面、稲稜ホール）
10:50～11:20 人間科学部学部説明（zoomリアルタイム配信、稲稜ホール）
11:25～11:55 商学部説明（zoomリアルタイム配信、稲稜ホール）

このようなオンラインの形式での学部説明会は今年度が初であったが、計画、実施、事後処理といろいろと煩雑であった。まずZoomの主催者は学院長や教務主任で、事務方からZoomのURLやパスワードを事前に学部の担当者に通知し、開催当日は説明会開始冒頭に学院長から各学部の担当者にご挨拶をいただいた。また学年としては、事前に2学年のMoodle上にZoomでの諸注意事項を生徒に周知し、各学部から事前に送付された資料を掲載し、生徒が閲覧できるようにするなどして事前指導をおこなった。また実施時間が限られているため、説明会後の質疑応答はその場では行わず、Moodle上に設定した質問コーナーに寄せてもらい、それを教員が取りまとめ各学部の担当者に送付し後日回答をいただく形にした。

また、学部説明会は学校行事扱いなので、Moodle上での出席について事務方でMoodle上のレポート機能を使い出席者の一元管理を行っていただいた。しかしながらネットワークトラブルやPCの不具合等で一部の生徒が出席不可となり後日各担任が個々の生徒に状況を確認をした（そうした場合には欠課扱いにはしなかった）。また各説明会は主に水曜日や土曜の放課後に行われたが、実施時間は20分乃至30分ではあるが、出欠の扱いは通常の授業の1時間分と同様の扱いとした。従って欠席の場合は1欠課扱いとした。また政経と社学は水曜日放課後連続する形で行ったがこの場合は、併せて50分なので欠席の場合は1欠課扱いとした。また木曜日はLHR時に行われたため、説明会を欠課しその後のLHRに出席したものは1遅刻扱いとした。このように出欠席の管理と

扱いの点で非常に煩雑且つ面倒であった。しかしながら兎にも角にも予定通り実施できたことにより、進路指導の観点からは当初の目的は達成できたといえる。

（イ）理工学部説明会

例年6月に、3年生の理系選択者を対象として、附属係属3校に対して理工キャンパスにおいて理工3学部主催の説明会が実施される。また、この日の午前中には、本庄学院独自にコーディネートした研究室訪問を行っている。キャンパスの雰囲気を感じながら、研究室生活を知ることができるなど、より踏み込んだ説明会であったが、残念ながら今年度は中止となった。

（ウ）学部開放科目

附属係属校の生徒は、早稲田大学各学部が行っている科目の中で予め高校生開放科目としてリスト化された中から選択し受講することができる。科目の単位は大学進学後に卒業単位の中に含めることができるため、附属係属生のアドバンテージとなっている。ただ、本庄学院は大阪の早稲田摂陵、早稲田佐賀程ではないにしろ、大学から距離があるため、大学5時限目6時限目の授業参加が難しく、オンライン授業参加が多くなる傾向がある。例年、春学期・秋学期それぞれ数名程度の受講生である。

2020年度の本校参加生徒数と講座は以下の通りである。

- ・ データ科学入門α（1名）
- ・ 数学基礎プラスα金利編（1名）
- ・ 数学基礎プラスα最適化編（2名）
- ・ 総合講座「ことばと法・社会」（1名）

2.6 生徒指導

（ア）生徒指導の方針

本学院には、早稲田大学全入制にともなって醸成されると考えられる一種独特の一体的な雰囲気がゆきわたっており、教員・生徒間の距離が近い。生徒の理解力も極めて高い。そのような環境下における生徒指導のあり方として、2020年度は、以下の三点を重点目標とした。

第一は、「自由な校風の維持と、それを可能にする自律の精神の涵養」である。自由な校風は本学院の良き伝統である。しかし、自由を享受するためには、それを可能にする自律の精神が必要であることは言うまでもない。すなわち、校則等の外的束縛を最小限に抑えるためには、衝動や欲望等の内的束縛をできるだけ断ち切り、そこから解放されて自律的に生活することが求められる。多感な時期にある学院生にとって、このことを実践することはもちろん容易なことではないが、常に、真の自由とは外的束縛が少ないことを言うのではなく、むしろ内的束縛から解放されていることを言うのだということを説き続け、自律の精神を涵養することを、第一の重点目標とした。

第二は「いじめや偏見のない、風通しのよい学院の構築」である。今日、一般社会においても、とりわけSNS利用によって誹謗中傷を受けたり、苦しめられたりする事例が後を絶たないが、本学院においても、残念ながら、同様の事例が、数は少ないもののしばしば発生している。上に掲げた「自律の精神の涵養」とも重なることであるが、一時の欲望や衝動に駆られて、あるいは他人に対する思いやりの精神の圧倒的不足から、不正確な情報を拡散したり、無暗に同調したりすることは厳に慎まなければならない。日頃から、相手の立場に立って考えるという当たり前のことができるようになるために、このことについての指導を行い続けることが重要である。

第三は、「互いに切磋琢磨すること」である。本学院では、基本的には全員が早稲田大学への進学を約束されているので、ともすれば目標を見失い、自分自身に負荷を掛けることを避けようとする生徒も少数ながら存在する。そうならないために、早稲田大学への進学そのものに満足するのではなく、能動的に、自分なりの目標を高く設定し、学業・課外活動の全般において、互いに切磋琢磨することを求めたい。一方、学院生の多くは、世界的に広がる格差の拡大や、AIの

台頭等による職業環境の激変を見て、以前に比べると、将来に対する明確な目標を持ちづらくなっているのも事実である。そのような状況に対応するためにも、「キャリアデザイン講座」等の、いわゆる「キャリア教育」のさらなる充実が求められている。

（イ）2020 年度の状況

一つ目の重点目標である「自由な校風の維持と、それを可能にする自律の精神の涵養」と二つ目の重点目標である「いじめや偏見のない、風通しのよい学院の構築」については、数は極めて少なかったものの、中には、やはり一時のその場の雰囲気や飲まれたり、相手に対する思いやりの気持ちの不足から、不適切な言動を取ってしまう例も見受けられた。そのような場合には、教務・組主任を中心とする教員による個別指導や、学期集会、LHR を利用しての訓話等によって対応したが、今後とも、教員・生徒が一体となって、「自律」に裏打ちされた「自由」な学校体制、お互いが最大限尊重し合えるような学校作りに努めていきたい。

三つ目の重点目標については、この目標を達成するためには、我々教員側が、本庄高等学院の最大の特長の一つが、受験のことを気にしないで自由に生徒の知的好奇心を刺激できることであることを常に意識し、生徒の学術への意識を高める努力を継続することが肝要であると思われる。そのため、2020 年度においても、教員側も、自らの専門分野における研究をより深め、学問面における生徒からの要求に柔軟に対応し、それによって生徒の学院生としての矜持を高められるよう、努力を続けた。また、いわゆる「キャリア教育」についても、コロナ禍により対面授業が実施できない期間であっても、ZOOM 等を利用して積極的に開催した。

総括すれば、2020 年度は、新型コロナウイルス感染拡大により、実際に生徒が登校した期間が例年に比べて極めて短かったこともあり、生徒指導件数は非常に少なく、対人傷害等の事案も皆無であった。しかし一方で、実際の登校期間が短かったことにより、十分な対人関係を築くことができなかった生徒がいたり、必要な時期にその訓練を十分に積むことができなかった生徒もいると思われる。2021 年度は、そのことも念頭に置き、より一層細やかな生徒指導によって、より安全・安心な学校作りをしていくことが必要であろう。

3. 生徒

3.1 生徒受入

（ア）入学試験全般 志願者数・入寮者数、出身都道府県等

- ・ 志願者総数 2,798 名、前年度比－508 名。一般・帰国生入試では、神奈川県・千葉県的女子が微増した他は減少となった。
- ・ 入学予定者数 322 名。男子 161 名(50.0%)、女子 161 名(50.0%)である。
- ・ α 選抜では、志願者数は横ばいで（前年度比＋1 名）、男女比も前年度から大きな変化はなかった。
- ・ I 選抜の志願者数は前年度比－30 名となった。前年度が過去最高の 3 桁に達したため減少が目立つものの、2018 年度、2019 年度と比べても少ない水準となった。
- ・ 学院説明会において、オンライン個別相談の実施は見送ったが、入寮者増に向け、生徒寮の相談に限定したオンライン個別相談会を実施した。入寮予定者は早苗寮 29 名、梓寮 3 名であった。
- ・ 帰国生入試・I 選抜を合わせた志願者数は 287 名（－115 名）。帰国生入試の定員増(2017 年度)、帰国生認定の要件緩和（2018 年度）で近年増加傾向が続いていたが、新型コロナウイルス感染症の影響もあり、大幅に減少した。

全体	埼玉県	東京都	神奈川県	千葉県	群馬県	他道府県	海外
2020	136	86	20	11	18	14	44
2021 (322名)	141	85	28	12	15	14	27

	43.8%	26.4%	8.7%	3.7%	4.7%	4.3%	8.4%
--	-------	-------	------	------	------	------	------

(イ) 広報・学校説明会

- ・ 学院説明会はすべてオンライン開催（動画コンテンツ配信とした。例年同様の7月・9月・11月に12月を加え、計4回開催した。
- ・ 寮の広報は、7月・9月・11月の学院説明会でオンライン個別相談会（各回定員45組）を実施し、3回すべて満員（135組）となった。このうち海外在住者は28組であったことに加え、上述の学院説明会への海外在住者参加数から、オンライン説明会が海外在住者への貴重な広報機会となったことがうかがえる。
- ・ 新型コロナウイルス感染症の影響で、外部個別相談の多くが中止となった。長期休業期間中の海外在住者向け学院見学会も開催を見送った。
- ・ 2021年度（2022年度入試向け）は感染症対策を更に徹底し、対面実施できるよう、定員や実施回数などを柔軟に検討していきたい。

(ウ) 入試実施体制

- ・ 2021年度入試より、一般・帰国生入試の本庄会場を廃止し、東京会場のみとした。天候・交通機関の乱れなどのリスク軽減、本庄会場設営の負担軽減など、期待していた効果がみられた。このことに伴う受験生からの問い合わせや混乱は見受けられなかった。
- ・ 2019年度入試で自己推薦合格者に辞退者が出たことを受け、2020年度入試から出願資格の文言を「早稲田大学本庄高等学院を第一志望とし、合格した場合は入学を確約できる者である」と変更したが、I選抜で他校進学を理由に1名辞退者が出た。

3.2 入学試験

(ア) 一般入学試験・帰国生入学試験

- ・ 一般男子 86 名、一般女子 79 名、帰国男子 10 名、帰国女子 10 名となった。

(イ) α 選抜

- ・ 志願者数は昨年と同水準の 287 名で、男子 113 名、女子 174 名となった。

(ウ) I 選抜

- ・ 志願者数 77 名。合格者 20 名となった。

3.3 指定校推薦

- ・ 一般指定校：入学者は男子 7 名、女子 20 名（指定 31 校中）となった。
- ・ 地元指定校：入学者は男子 6 名、女子 9 名となった。

3.4 入学決定者の集い

例年 2 月下旬、入学手続き者がある程度確定したあたりの土曜日に入学決定者を集めて教員からの挨拶、国数英主任からのアドバイス、生徒によるミニコンサート、校歌歌唱指導、應援部からのエールの内容で実施しているイベントである。

今年度は対面での実施が不可能なため、上記の内容を録画し 3 月 8 日までのオンデマンド配信とした。

4. 生徒への配慮

4.1 奨学金

2020 年度奨学金の状況は以下の通りである。

奨学金名	受給者数
似鳥国際奨学財団	1
朝鮮奨学会	1

茂木本家教育募金	1
古岡奨学会	2
埼玉県高等学校等奨学金	3
東松山市奨学資金	1
あしなが育英会	1
正覚会	1
公文公記念奨学金	1
長島記念財団	1
大隈記念	8
小野梓記念	13
早稲田カード	3
早大生協給付	4
本庄高等学院	3

4.2 保健室

(ア) 健康診断

4月に緊急事態宣言が発出され、休校期間が延長となり、4月に実施する予定であった生徒定期健康診断を7月30日（木）に実施した。例年とは異なり、感染対策を十分に講じる必要があり、当日は授業を中止し、学年ごとの分散登校で実施した。新体育館を使用して実施する初めての健康診断であったが、アリーナは十分なスペースがあるため、密を防ぐ配慮ができた。今後もコロナ禍における健康診断の在り方を検討する必要がある。

(イ) 課外講義

例年実施している救急法講習等は、感染防止対策が難しいため実施できなかった。次年度は感染防止対策を十分に講じた上で、可能な講義を工夫して行っていきたい。

(ウ) 健康相談

学校医等による健康相談（歯科・耳鼻咽喉科・眼科・内科・整形外科）を実施した。また、今回は新型コロナウイルスの影響により、健康診断欠席者が多かったため、この機会に未受診者のフォローを行った。

(エ) 感染症対策

2020年1月より新型コロナウイルス感染症の対策に迫られ、現在も引き続き先の見えないコロナ禍が継続している。刻々と変わる状況に翻弄されながらも、6月の登校再開、分散登校を経て、9月により一斉登校を実現することができた。登校再開に際して、学校における「新しい生活様式」のもと、様々な感染症対策を講じた。登校時の健康チェック、常時マスクを着用すること、手洗い・消毒の徹底、換気の徹底、パーティションの設置等、全教職員の協力体制のもと感染防止対策を実施し、感染を大きく広げることなく2020年度を終えることができた。

この1年で社会全体の意識が大きく変わり、常に感染症対策を念頭に物事を考えることが求められた。長距離通学者が多い学校、また、生徒寮を持つ学校として、地域の学校よりも感染リスクが大きく、厳しい対策をとらざるを得ない状況にあったが、それに伴う損失も考え、バランスをとることが難しかった。生徒・教職員の理解のもと、感染対策を講じながら、極力、通常の教育活動を継続していくことが課題である。

例年、流行しているインフルエンザに関しては、今年度は報告がゼロであった。季節を問わず感染症対策を実施していることで、予防できている感染症も多くある。

(オ) カウンセリング

毎週水曜日と土曜日の午後に、大学学生相談室の心理専門相談員（臨床心理士）による相談を実施している。今年度は、オンライン授業期間においても、電話による相談を受け付けた。オンライン授業になると、生活リズムを崩してしまう生徒が目立ち、心身の不調を訴えることも散見された。また、発達的な特性により、困難を抱えて相談するケースも増加傾向にある。今後の様子を見て、カウンセリングの時間枠を増やしていくことが検討課題である。

4.3 共済見舞金

本学院では生徒の疾病・不慮の事故・災害等による医療費を相互扶助によって補助し、保護者の経済的負担を軽減することを目的に、独自の共済制度を設け、全生徒から年額 5,000 円を徴収している。15 年度から、より公平でわかりやすいシステムを目指し、現行制度の運用を開始した。これにより、本規程の所管箇所である早稲田大学学生部が大学生を対象に運営する学生健康増進互助会の基本的な考え方やルールに沿った医療給付制度となった。

18 年度、19 年度と 2 期続けて赤字の収支決算となったため、20 年度より財政健全化を目指し自己負担額の増加、給付額上限の引下げ、日本スポーツ振興センターとの併用不可、という制度改革を実施している。

過去 5 年度分の支給実績は次の通りである。

年度	2016	2017	2018	2019	2020
支給人数（延べ）	770	791	916	891	451
支給人数（実数）	270	254	294	247	136
支給上限額到達者数	11	6	11	11	4
支給金額（円）	4,350,717	4,146,464	5,092,429	4,910,736	1,915,688

4.4 学校安全管理

(ア) 安全管理体制

キャンパスが本庄市と児玉町にまたがる浅見丘陵に位置し、その全域が大久保山遺跡であること、さらに自然保護の事情もあり、校門や塀がない。そうした都市部の学園とは大きく異なる環境の中で生徒の安全確保に取り組むため、教員日直制を設けている。日直教員は、下校時刻の遵守のために生徒に帰宅指導をするだけでなく、校地巡回により不審者進入の未然防止に努めている。現実的で科学的な安全管理推進に向け、キャンパス管理室（運営は外部委託）を設置し、キャンパス内のセキュリティを強化している。24 時間体制での巡回・点検に加え、最新テクノロジーを活用した防災・防犯・入退出管理機器の設置による監視体制と緊急時の出動体制を維持している。校舎内のセキュリティ機能は高いが、広大なキャンパスに点在する諸施設のセキュリティレベルをさらに向上させることが今後の課題である。

本庄キャンパス全体としては、労働安全衛生法第 19 条第 1 項に規定される安全衛生委員会が設置され、本学院を含むキャンパス内各箇所から委員が選出されている。委員会は毎月定例で開催され、キャンパス内の安全衛生全般について報告や確認を行なっている。

2014 年 2 月に埼玉県本庄警察署との相互連携に関する協定書を締結した。公立校と比較し、地元の情報が入りにくい私立学校の特質上、警察と連携を図ることは、生徒の健全育成に資するだけでなく、地域との情報ネットワークを構築し、安全体制を強化するうえでも大きな意義があると考えられる。

9 月 16 日には、地元消防署とも協力し、95 号館での火災発生を想定した避難訓練を実施し、生徒、教職員の防災意識の高揚を図った。また、生活の様々な場面で生徒がスマホ等の情報機器を利用する機会が増加する中、違法・有害サイトへのアクセスによる犯罪に巻き込まれないよ

う、情報教育も強化している。

(イ) 交通安全指導

近年、自転車通学の生徒は減少しているが、自らが加害者にも被害者にもなり得ることを踏まえ、交通安全への啓発を行なうとともに、推奨通学経路を指定し、指導を続けている。電車通学の生徒については、本年度は教員が実際に電車に乗り、生徒の乗車状況を監視するなど、新型コロナウイルス感染予防のための指導を行なった。

5. 生徒進路

5.1 進学学部

2020年度は322名が早稲田大学各学部へ進学した。各学部・学科・専攻・専修（基幹理工学部は学系）ごとの男女別の進学者数は次の表の通りである。

他大学受験者はいなかった。

学部	学科	専攻	専修	進学者数		
				計	男子	女子
政治経済	政治			27	7	20
	経済			33	20	13
	国際政治			13	4	9
法				44	25	19
文化構想				21	8	13
文				16	8	8
教育	教育学科	教育学	教育学	5	1	4
			生涯教育学	0	0	0
			教育心理学	1	1	0
			初等教育学	1	0	1
	国語国文			5	3	2
	英語英文			3	1	2
	社会		地理歴史	1	1	0
			公共市民学	5	2	3
	理学		生物学	2	1	1
			地球科学	0	0	0
	数学			1	1	0
	複合文化			4	1	3
商				32	22	10
基幹理工	Mathematical Science			0	0	0
	学系 I			0	0	0
	学系 II			22	20	2

	学系 III			9	6	3
	Computer Science and Communications Engineering			1	1	0
創造理工	建築			8	5	3
	総合機械工学			1	1	0
	Mechanical Engineering			0	0	0
	経営システム工学			7	7	0
	社会環境工学			5	2	3
	環境資源工学			1	1	0
	Civil and Environmental Engineering			1	1	0
先進理工	物理			1	1	0
	応用物理			1	1	0
	Physics			0	0	0
	化学・生命化学			3	2	1
	応用化学			1	1	0
	Chemistry			0	0	0
	生命医科			3	2	1
	電気・情報生命工学			7	4	3
	Bioscience			0	0	0
社会科学	社会科学			19	6	13
	ソーシャルイノベー ションプログラム TAISI			1	0	1
人間科学	人間環境科学			0	0	0
	健康福祉			2	0	2
	人間情報科学			1	0	1
スポーツ科学	スポーツ科学			3	3	0
国際教養	国際教養			11	3	8
合計				322	173	149

5.2 新たな動き

2020年9月25日（金）早稲田大学本庄高等学院は、同じ附属校である早稲田大学高等学院、係属校である早稲田実業学校とともに、日本医科大学との間で「高大接続連携に関する協定」を締結した。この中では、「本協定は、大学および高校が、相互の教育分野に係る連携・交流を通じて、高校生の進路に対する意識や学習意欲を高めるとともに、大学教育・高校教育の充実・活性化を図ることを目的とする。」ことがうたわれている。

特筆すべきは、日本医科大学への各校2名の推薦枠をいただけたことである。これを受け、学内で要項を整備し、2月末には生徒保護者へ周知した。改めて、今後の進路指導の充実が求められる。

6. 教員の活動

6.1 教員の研究活動

(ア) 特別研究期間

3名の教員が特別研究期間の制度を活用し、1年間研究に取り組んだ。

(イ) 研究紀要

本学院専任教員、非常勤講師等が執筆した研究論文や調査報告を掲載し、年1回刊行している。2020年度は第39号を刊行し、論文9本を収録した。

(ウ) 教員の研究成果

早稲田大学本庄高等学院専任教諭は、個人研究費を支給されるほか、本年度は科学研究費（奨励研究）2件、早稲田大学特定課題研究費（新任の教員）2件、同（基礎助成）6件、同（特定課題B）5件、早稲田大学教育総合研究所の研究助成（兼任研究員2名）を受給している。これを受けて、活発な研究活動が展開されている。本学専任教員の研究成果は多岐に及ぶが、以下、申告のあったものについて、列記し、紹介する。

論文

- ・ 峰真如・宮田庸一「確率分布空間における幾何学的構造について」『教育と研究』39, 13-21 (2021年)。
- ・ 羽田真「私立中学・高校における懲戒退学処分と校長の裁量の範囲」『教育と研究』39, 29 - 52 (2021年)
- ・ 松田英里「戦傷病者からみる戦争体験と日本の国家補償制度の特質」『政経研究時報』No. 23-2、2020年、pp. 12~13 (査読なし)
- ・ Akatsuka, Y. (2020). Promoting Critical Thinking Skills in an Online EFL Environment. *Journal of Pan-Pacific Association of Applied Linguistics*, 24(2), 95-113.
- ・ Akatsuka, Y. (2020). A Pedagogical Approach to Foster Critical Thinking Skills in Japanese EFL Learners-Focusing on the International Baccalaureate's Pedagogical Framework. In D. Coulson, S. Datta & M. Davies (Eds.), *Educational reform and international baccalaureate in the Asia-Pacific* (pp. 37-56). IGI Global.
- ・ 成瀬政光(2020). 高等学校数学科における生徒の定積分の概念受容：縮小過剰型誤概念とその修正に関する実践. 数学教育学会誌, 61(1・2), 1-15. 査読あり.

口頭発表

- ・ 松田英里「戦傷病者からみる戦争体験と日本の国家補償賠償制度の特質」公益財団法人定例研究会、2020年9月7日、オンライン開催（招待あり）
- ・ 松田英里「戦傷病者をめぐる国家と社会」一般財団法人歴史科学協議会第54回大会報告、2020年11月29日、オンライン開催（招待あり）
- ・ 望月真帆「CELTA Insiders」(Emily Choong氏との共同発表)、2020年12月26日(土)、TALK第4回例会（オンライン開催）
- ・ 根本裕介「On the regulators of Hesse cubic curve and Kampe de Fériet hypergeometric function」, 超幾何方程式研究会2021, 神戸大学, 2021年1月5, 6日（オンライン）
- ・ 成瀬政光. 高等学校数学における事例効果に関する実践と一考察. 日本数学教育学会第53回秋期研究大会, 2020. 11. 14(オンライン).
- ・ 成瀬政光. 高校数学における事例効果の検証および教育的示唆：対数に関する事例とその学習効果との関連について. 日本数学教育学会第102回全国算数・数学教育研究(茨城)大会, 2020. 08. 05(誌上発表).

6.2 社会活動

(ア) 学会役員

- ・ 一般財団法人歴史科学協議会 全国委員 (2018 年 11 月～2020 年 11 月)
- ・ TALK (田辺英語教育研究会) 研究企画委員
- ・ 日本英語教育学会・編集委員
- ・ 日本国際バカロレア教育学会・理事

(イ) 学外委員

- ・ 本庄市行政不服審査会委員

(ウ) 学外講師・出張授業等

- ・ 公立大学法人高崎経済大学 非常勤講師
- ・ 共愛学園前橋国際大学国際社会学部 非常勤講師
- ・ 日本放送協会 (NHK) ラジオ高校講座「コミュニケーション英語 II」講師
- ・ 文教大学国際学部
- ・ 子ども大学ほんじょう学長
- ・ 本庄市民総合大学講師

(エ) その他

- ・ 文部科学省国際バカロレアコンソーシアム事業令和 2 年度「IB の教育効果に関する調査研究事業」研究分担者

(オ) 教科書等の執筆

- ・ New Discovery English Communication III Teacher's Manual. (文部科学省検定済み 高等学校外国語科 (コミュニケーション英語Ⅲ) 教科書指導書分担執筆 開隆堂)
- ・ 新・情報の科学、高等学校情報科教科書、日本文教出版
- ・ 東京書籍文科省検定教科書外国語・編集協力者
- ・ 物理基礎・物理 文科省検定教科書 実教出版
- ・ 『わたしたちの地理総合 世界から日本へ』文科省検定済教科書 高等学校 地理歴史科用。二宮書店 (分担執筆)。

(カ) 外部資金の獲得

- ・ さくらサイエンスプラン、JST、National Junior College の受け入れ、300 万円
- ・ さくらサイエンスプラン、JST、Mahidol Wittayanusorn School の受け入れ、300 万円
- ・ 中谷医工教育振興助成、「子供たちと考える水の環境」、30 万円
- ・ 下中科学研究助成金 (配分額 300 千円 (直接経費:300 千円))、「英語授業で批判的思考力を育む教育方法の開発」
- ・ 独立行政法人日本学術振興会科学研究費補助金奨励研究「高校数学での概念受容学習における事例効果の実証研究」(20H00794, 310千円)

7. 教育研究施設

7.1 校舎整備計画

新体育館の工事は 18 年 7 月から本格的に着工され、2020年2月に竣工した。これは敷地面積 63,077.60 m²、延床面積 4,326.87 m²、地上3階の建物である。この新体育館が完成し、東の稲稜ホールから新体育館までと東西に長い施設配置ではあるが、本学院の教育施設は一応の完成を見たことになる。

新体育館に関して、2020年はコロナ禍の中、十分な使用ができたとは言えない。イベントへの利用、市民開放を含めて、本庄学院教育にどの程度貢献するかは今後の検討である。

7.2 学内施設

(ア) 教室

教室は普通教室 23、ゼミ室 4、理科実験・講義室 5、情報処理室 2、美術室 1、体育講義室 2、地理演習室 1、音楽教室 1、家庭科調理室 1、メディアルーム 1、CALL教室 1、大教室 1 で

構成され、各教室にはIT機器とスクリーンが設置されている。

（イ）稲稜ホール

稲稜ホールは学年集会や、各学年対象の健康教育講演会、外部有識者による特別講演会、その他各種様々なイベント、音楽の授業やブラスバンド部・グリー部の活動、演劇部・軽音楽部等のミニコンサート等に常時利用されるほか、学外の機関の利用にも供している。それらを含め年間の施設利用回数は、2018年度は100回を超えていた。本学院の教育活動上極めて重要な役割を果たしていたが、2020年度はコロナ禍の中、利用のガイドラインについて感染状況に応じた対応をせざるを得なかった。厚労省のコロナ対応に関する換気の基準は満たしている。

（ウ）CALL教室

PC教室に隣接した46名対応の教室である。教卓周辺はスクリーンを使った発表に適した広めのスペースがあり、2名1組の机にはPC、カメラ、マイク付ヘッドホンが備わっている。授業の展開に応じてアクティブラーニングや音声・文書ファイルの配布と回収が可能である。放課後は事前予約制で、発表リハーサルや課外講義、説明会やワークショップにも活用されている。2019年以前は、授業以外の活用事例としては、始業前30分間の「英語朝練」や英語の学内公開授業（ポスターセッション）会場としての使用例があった。

（エ）コンピュータ・インターネット環境

現校舎を使用するようになってから、PC室2室（46名対応）で多様な授業や課外活動を展開している。PC室は教科「情報」、情報系の選択科目以外に、情報環境を必要とする様々な教科で使用され、また、休み時間・放課後は生徒に開放され、創作活動・検索活動に役立てている。

また全ての教室にLANの情報コンセントとプロジェクター・スクリーン・書画カメラが設置されている。また校内3カ所に無線LANのポイントがあり、情報コンセントのない場所でもWiFiでノートPCやタブレット、スマホ等でインターネットへの接続が可能である。

このような環境のため、ノートPCやiPadを持参する生徒が増えている。2020年度はコロナ禍の中で、不特定多数が使用する学校の端末を使いたくないという生徒が多いのか、自分のPCを持参する生徒が増えた印象である。校内の至る場所で課題や調べ物に役立てているようである。

ネットワークの帯域幅にもストレスはない。

コロナ禍によるオンライン授業が増えたことで、ノートPCやタブレットを持ち歩く生徒が大幅に増えた。今後は、PC室のデスクトップパソコンを使って授業を行う時代から脱却する動きをしなくてはならないと思っている。

（オ）体育施設

体育館

本年度より、校舎隣に、新しい体育館が建設された（96号館）。従来の学院体育館より広いメインアリーナと、部室やトレーニング室、多目的室等が併設された施設となった。生徒の移動時間も大幅に削減され、冷暖房も完備されたため、より一層充実した授業や部活動が実施できることが期待される。

共通教室棟体育館

本年度より、大学学生課所管本庄セミナーハウスの施設となったが、主に雨天時の体育や部活動で使用申請を行い、活用した。今後も有効活用していきたい。

サッカー場

サッカーコート1面を十分に確保できる広さであり、それを活かしたサッカーの授業展開ができていく。授業や球技大会等行事、クラブ活動と年間を通しての使用頻度は非常に高い。水はけは非常に良好である。

ラグビー場・陸上競技場

陸上競技、ラグビーの授業展開が十分にできる広さである。体育祭、稲稜祭、球技大会、マラソン大会等の行事、また災害時の第一避難として定めており、その使用頻度は高い。クラブ活動

では、陸上部、ラグビー部が使用している。

野球場

野球部の活動以外では、主にソフトボール、ゴルフの授業で使用している。各種目授業を十分に展開できる広さである。マラソン大会ではスタート地点とし、クラブ活動では、硬式野球部が使用している。

テニスコート

テニスコート6面（クレー4面・砂入り人工芝2面）は、テニスの授業と、クラブ活動では硬式テニス部とソフトテニス部が共用している。

（カ）図書室

本年度は274日の開室予定であったが、新型コロナウイルス感染症のため、4/1-6/28、1/21-2/11、2/19-3/4の105日間が臨時閉室となった。また、分散登校の実施や図書室入口ブックポストの設置も影響し、利用者数は4,940人（2019年度約11,300人）に留まり、前年度比43%（56%減少）となっている。なお、図書室を頻繁に利用する生徒はまだ一部に限られていると思われるため、より多くの生徒に図書室を有効活用して貰えるよう、学内関係個所と協力しつつ所蔵資料の充実、図書室内の環境整備などに努めたい。

（キ）食堂

食堂はホールとパンショップから構成されている（運営は早稲田大学生協に委託）。生徒の食堂利用時間は、主に11時00分から11時20分までのコーヒースタンドと13時10分から13時50分までの昼休みであるが、本年度は新型コロナウイルス感染症のため、休業や利用時間の短縮を余儀なくされた。食堂の座席数は442であるが、特にピーク時間帯の一時的な密状態を避けるために、座席数を半分に制限するとともに、相向かい席の中央には透明パーティションを設置した。その他の付帯設備としては、自動販売機4台、給茶機3台、食券販売機4台が設置されているが、給茶機の利用は停止した。

なお、会議室が狭いため、教諭会等での密を避けるために、本年度はその会場としても利用した。

（ク）その他

11月4日に3年生全員を対象に実施したGTEC試験の会場や生徒の待機場所として、93,94号館（早稲田リサーチパーク）を利用した。他の利用者との混乱を避けるため、施設入口等には管理者を配置し、生徒への注意喚起を行なった。

7.3 スクールバス

今年度はオンライン授業、分散登校、全員登校の期間があり、また部活動の実施時間帯や最終下校時刻が変動していたため、常にバスのダイヤが変更されている状態であった。今年度からModleのアナウンスメントで全校にメールによる一斉連絡が可能となったため、こちらのシステムを用いて、逐一アナウンスを行った。また、新型コロナウイルス感染症予防のため、バスの密な環境を避けるため、通常6台で運行しているスクールバスを7台運行とした。

7.4 早苗寮

今年度は、新型コロナウイルスのため、新入寮生歓迎会と防災訓練は実施出来なかった。クリスマスくじ引き大会は、Zoomを用いて人が一カ所に集まり過ぎないようにして実施した。年間を通して、共用部でのマスクの着用、他室への訪問禁止、食堂に仕切りの設置、トレーニング室の使用禁止など様々な対策を講じた。

7.5 寮寮

寮寮の2020年4月の入居状況は78名であった。寮長・寮母が住み込み、他に複数の女性スタッフに寮生活をサポートしていただいている。新型コロナウイルスの影響で自治会行事はほとんど行うことができなかったが、12月にはしっかりと感染対策をしつつ、クリスマスくじ引き大会を行った。11月にはベトナムからの留学生1名（滞在期間は4ヵ月）を迎えた。

8. 社会・大学との連携

8.1 保護者との連携（保護者の会）

本校ではPTAを持たない。代わりに保護者の会が運営されている。PTAとの違いは、保護者の会は、教員がその動きに関わらずに、会独自に活動していることである。

保護者会全大会と保護者会主催の総会を例年、年2回実施している。第1回目は6月初旬の土曜日放課後に開催する。クラス幹事決定と1年間の学習や行事に対する諸注意が内容の基本である。第2回目は12月の冬季休業に入った最初の日曜日に実施する。クラスや行事の状況報告、進級進学に向けた指導が内容の中心となる。3年生では、ミスマッチのない学部選択に向けた進路指導のため、この保護者会においてクラス組主任との間で三者面談が行われる。両方とも、同時に寮の保護者会も並行して開催される。

本年度は、コロナ禍対応のため学校に余裕がなく、6月に予定していた第1回目を9月20日（日）にオンラインで実施した。第2回目は予定通り12月13日（日）に実施したが、これもオンラインで行った。面談もオンラインで行った。

全大会における質疑、総会の決議事項における質疑や採決において、オンラインだとなかなかやりにくい側面がある一方、対面では経費や時間がかかるため参加が難しい、海外や遠距離在住の保護者の参加が可能になること、特に個人面談が簡単にできることからオンラインの良さもわかった。

また、例年入学式の後で実施している保護者会や学校のシステム概要の説明会が、入学式中止のため実施できなかった。このことは、その後1年生クラス幹事の選出のトラブルや成績や出欠の扱いに対するクレームや質問が多くなることにつながった。

8.2 卒業生との連携（同窓会）

2020年度はコロナ禍により、稲稜祭における出店や記念グッズ作成、卒業生への説明会など、同窓会活動の場面が持てなかった。

一方で、2021年度以降のキャリア教育を円滑に進めるため、一層の同窓会と学校との有機的結びつきの相談を行った。

寮生はペットボトルを凍らせて部活動に持参することが難しい。夏の部活動における熱中症を防ぐために、早苗寮に大型冷凍庫の寄付をいただいた。

8.3 地域との連携

本庄学院は開校以来、教員の持つリソースや学校設備・器具を用い、地域の人たちに対して講習会や特別講義を実施してきた。本庄キャンパス内に本庄プロジェクト推進室ができてからは、連携を行い、多様な講座を地域に公開している。2018年度より、本庄市内小学校へ出張授業を行うプロジェクトが開始されたが、2020年度はコロナ禍によりすべて中止となった。

また、生涯教育を目的とした市民総合大学、こども大学ほんじょうにも講師・学長の立場で協力をしている。これも2020年度はすべて中止となった。

8.4 大学・他附属校との連携

本庄高等学院は早稲田大学の附属校であるため、大学との連携プログラムが多い。ここ数年で、大学との連携プログラムを検討する動きが進んでいる。例えば、2019年度は創造理工学部英語プログラム学生が夏に本庄セミナーハウスに2泊して行うプログラムに、本校生徒6名が参加した。

2020年度は、コロナ禍の中であったが、いくつかの新しいプログラムの動きができた。その2つについて紹介する。

(ア)次世代アントレプレナー育成事業 (EDGE-NEXT)

このプログラムは早稲田大学および他 4 大学で毎年実施しているプログラムで、チームのコラボレーションにより、街おこし、農工商振興など地域特有の社会的課題をイノベーション創出の視点によって解決を図るプログラムである。EDGE-NEXT は、早稲田大学が文科省から受託し、中心的に運営する学生の起業家教育、事業化支援を行う機構で、事業だけでなく地域社会の問題解決に資する人材育成も目標としている。

2020 年度は本庄の地域社会をテーマとすることになり、本校の生徒も参加の予定であったが、1 学期の授業時数確保のため、期末試験を夏休み明けに移動させたことにより、運悪く試験 1 週間前にこのプログラムが重なり、生徒参加はかなわなかった。教員 1 名が審査員を務めた。

(イ)企業連携ワークショップ参加

東京都練馬区にある高等学院との共同主催、大学教務部のサポートを受け、2021 年 2 月～3 月に企業連携ワークショップを開催した。このプログラムは従来大学生が企業と連携しながら、企業が提供した「答えのない問題」についてチーム毎に解決策を競うというプログラムで、協力企業が多いため、学生にとってはリーダーシップやインターンシップ養成の場となっている。

今回は、大学導入教育と位置づけ、上下水施設・機器の会社である水 ing から出された問題に対して、高等学院生徒 3 名、本庄高等学院生徒 2 名がチームを組んで取り組んだ。取り組みはすべてオンラインである。2 月 3 日のオリエンテーションの後、4 回の水 ing によるセミナー、そして、大学生 OG の指導を受けながら自分たちの考えをまとめ、3 月 3 日に大学教務部・理事・水 ing 社員参加の元、成果発表と講評が行われた。参加生徒のフィードバックもしっかりしており、大学・企業の協力体制も素晴らしかった。

今回は、PR 不足で参加生徒が少なかったが、次年度はより多くの生徒が参加し、チーム毎に優劣を競えるように、PR 方法を検討したいと考えている。

(ウ)教育実習

例年 6 月に受け入れをしているが、今年度はその時期がオンライン期間であったため、9 月にずらして行うこととした。

2 週間 (9 月 3 日 (木)～9 月 14 日 (月)) および 3 週間 (9 月 3 日 (木)～9 月 19 日 (土)) に 11 名の実習生を受け入れた。実習前の打ち合わせ会は従来の日程である 9 月 1 日 (火) に行なった。実習生は教壇実習しながら、学校現場の業務の体験に努めた。教育実習の反省会は 2 週間および 3 週間の実習最終日にそれぞれ実施した。

(エ)WASS(Waseda Affiliated Schools Symposium)の開催

両附属校の結びつきと相互発展を目的として、標記シンポジウムが開催された。成果発表は 2021 年 2 月 7 日であるが、活動は 2020 年 11 月 23 日より開始され、参加者募集・ミニイベント等をこの間、13 回オンラインで行っている。高等学院側生徒からの要請があり、本庄学院生徒が趣旨に同調し開催した形である。運営メンバーが高等学院 5 名、本庄学院 4 名、参加者が高等学院 17 名、本庄学院 22 名であった。またメンターとして OB/OG 3 名、教員が双方 4 名ずつ参加した。

附属校とはいえ、今まであまりコラボレーションプログラムを実施したことがなく、オンラインとはいえ、WASS の開催は、両附属校の連携活動を考えるきっかけになったことは確かである。2 月 7 日の成果発表時には、両校教員がミーティングを行い、WASS 以外の連携について意見を交換した。また、この 4 月には両校新執行部が Zoom で懇談を行い、連携について意見交換を行った。

8.5 募金

2020 年度の教育振興資金寄付件数は 54 件、寄付金額は 8,630,000 円であり、その他にも本庄高等学院 指定寄付や部活動指定寄付を 9 件、1,353,887 円を受け入れた。今後も引き続き、さらなる募金獲得に向けて今まで以上に幅広く活動を行なう必要がある。

9. 管理運営

9.1 教諭会

2020年度は定例教諭会が11回（入試判定会、卒業・進級判定会は除く）、臨時教諭会が30回開催された。前年度もそれ以前に比して臨時教諭会の回数が新型コロナウイルスへの対応のために多くなったが、今年度はそれ以上となった。3月中旬以降は感染に配慮しZoomによるTV会議で実施し、いまだに同じ状況である。

なお、臨時教諭会には生徒指導を議題とする会議が複数回含まれる。

9.2 委員会

20年度は19年度に加え、それ以前の委員会活動の反省を含め、大幅な改編・統廃合を行なった。校務分掌のスリム化、教員の業務量の軽減化を目指した。統合の他、施設検討委員会、情報管理運営委員会、募金委員会は廃止した。以下に、各委員会の検討事項及び取り組みを紹介する。

おおよそ、一人の教員が2委員会を兼ねることになる。

委員会	業務
教科主任会	予算関係、カリキュラム・成績・進級・進学関連、および教科・学校の教務関連の内容を主として扱う。図書委員会を包含している。
学年主任会	奨学生の選考、生徒表彰の選考
生徒活動支援委員会・人権教育委員会（生徒会・稲稜祭・生徒指導、いじめ防止委員会（いじめ事案が発生した場合）	日常の生活指導、学校における安全・安心確保への取り組み、稲稜祭（文化祭）開催、問題行動が発生した際の事実確認と生活指導計画の立案と実施、及び外部有識者による教員研修実施生徒指導委員会、人権教育委員会の旧来の生徒活動に関わる委員会を統合し、そこにそれまで生徒担当教務の職務だった生徒会・稲稜祭に関わる業務を含めた。人数を拡大しながら、生徒指導業務を半期交代にし、業務軽減を狙った。
寮委員会	生徒寮の生活指導、寮規則の検討
安全委員会	旧来の学校行事運営委員会を母体として、加えて保健、その他安全配慮を目的として新しく作った。
広報・出版委員会	研究紀要の原稿依頼・編集
入試委員会	『学院案内』の入試部分の作成、指定校の決定、学校説明会における個別相談の実施、各種入試説明会への参加、入学試験要項の作成等
進路指導委員会	「秋のキャリアデザインウィーク」の立案及び実施、卒業論文報告会の準備及び実施、学部説明会の検討、卒業論文の評価や手引書の改訂、提出時期等の検討
留学・海外交流委員会	今までの国内外交流委員会を改組し、留学の要素を加える
学校評価運営委員会	学校評価の立案、実施依頼、報告書の作成

9.3 教科別教員構成

教科	専任教諭	非常勤講師	合計
国語科	6	8	14
地理歴史・公民科	7	12	19
理科	6	8	14
数学科	7	5	12
保健体育科	5	5	10
芸術科	1	3	4
英語科	9	10	19

情報科	1	4	5
家庭科	1	1	2
第二外国語	0	4	4
養護	1	0	1
合計	44	60	104

9.4 持ち時間数

2020年度の教員の平均授業担当時間数は次の通りである。

(ア)専任教員 13.9 時間 (除長期欠勤者・特別研究期間適用者・養護教諭)

(イ)役職者以外 14.8 時間

(ウ)役職者(教務) 7.6 時間

(エ)非常勤講師 6.0 時間

9.5 教員構成

(ア)年齢別構成

資格	人数	21～ 30 歳		31～ 40 歳		41～ 50 歳		51～ 60 歳		61～ 70 歳	
		人数	比率	人数	比率	人数	比率	人数	比率	人数	比率
専任教諭	44	2	5%	13	30%	14	32%	8	18%	7	16%
非常勤講師	60	33	55%	6	10%	6	10%	7	12%	8	13%
全体	104	35	34%	19	18%	20	19%	15	14%	15	14%

(イ)男女別構成

資格	人数	男		女	
		人数	比率	人数	比率
専任教諭	44	34	77%	10	23%
非常勤講師	60	42	70%	18	30%
全体	104	76	73%	28	27%

※ 早稲田大学は現在、女性教員を増やすことに取り組んでおり、大学全体で女性教員が 25% 以上となることをこの 5 年間の目標としている。各箇所には、5 年毎に女性教員増の目標値の設定が求められる。本庄学院は、今後 2024 年までの目標値として 66% を掲げている。

9.6 事務組織

事務所には、事務長の他、庶務係に専任職員 3 名、派遣社員 3 名が、学務係に専任職員 2 名、嘱託職員 2 名、派遣社員 2 名が配置されている(うち嘱託 1 名は理科準備室と兼務)。専任および嘱託職員の嘱任・解任および配置転換は大学が行ない、派遣スタッフについては、大学が契約窓口となり、人材サービス会社から派遣されている。なお、図書室の運営については業務委託となっている。

9.7 生徒の出欠席・成績処理

生徒の出欠席・成績管理のために、早稲田大学オープンソースソフトウェア研究所が開発した学院向け教務システム「SchoolN@vigator」を導入している。同システムはリレーショナルデー

データベース化による情報の一元管理を特長とし、高度なセキュリティ保持や容易なデータ抽出・加工が可能になった。

ユーザーインターフェースとしてウェブブラウザが採用されていることも、操作性や利便性の向上に役立っており、特に教員についてはデータの閲覧・編集がインターネット環境さえ整えばどこからでも可能になっている。

今後は、生徒の保健管理や課外活動管理などシステム化されていない事項を含め、ユーザーの希望を取り入れながらシステムの改善に取り組みたい。具体的な運用は以下の通りである。

- ・ 出欠席管理：科目担当者（教員）が毎時限の出欠席を入力した後、学期毎に組主任が欠席理由、成績通知表用所見を入力する。その他、学校行事など出欠席の一括入力が必要となる例外対応や集計処理は職員が管理する。
- ・ 成績管理：科目担当者が生徒の成績を入力した後、チェックから確定処理までを教員が行なう。成績通知表・指導要録・調査書等の成績関連帳票の自動出力が可能となっている。進学学部への調査書提出時など一括処理やデータ集計が必要な部分については、職員が編集・管理を行なっている。

9.8 広報・連絡

（ア）学校活動の広報

広報誌として『緑風』と『杜』を発行している。『緑風』は本庄高等学院の発行する学校サイドの広報誌で、6月と12月に発行し、教員や生徒が執筆するコラムや行事報告、クラブ活動の戦績報告などで構成されている。『杜』は保護者の会「杜」編集委員会が年1回発行する保護者向け広報誌である。同委員会の自主的な取材・編集により、学院施設や生徒行事・トピックの紹介、保護者の会の活動報告などを掲載している。

学校 Web サイト (<https://waseda-honjo.jp/>) では学院生活に関するニュースや出来事を継続的に発信しており、トップページの写真やリード文を見るだけで、本学院の最新の動向が伝わるようなページ運用を行なっている。また本年度は学外者のみならず、学院関係者に新型コロナウイルス感染症への対応の情報公開にも大きな効果を発揮した。課外活動のページでは、部活動ごとの活動概要（部員数・活動日・実績）を伝えるとともに、独自の Web サイトがある公認団体（クラブ）は、団体独自の情報発信を行なっている。更新作業が追いついていかないのが難点である。学校にとって、今や Web サイトは情報化社会の現在、学校の情報を広く知ってもらい、必要な情報や書式を得るための重要な手段である。

入試に関しては2020年度より、一般・帰国生入試はWeb出願となっている他、合格発表もWebで行っているため、受験生は基本的に本学院のWebサイトを見る必要がある。タイムリーで正確な情報発信はWebサイトの必要条件であり、このことに向けての体制づくりは今後も継続的に検討していく必要がある。

また、海外の交流校や、外国人の保護者のために、英語版の学校案内を作成した。作成に当たっては、保護者や姉妹校の教職員・生徒が必要としている情報を掲載することを主眼に置き、本庄高等学院の保護者に編集の一翼を担っていただいた。本文中の英文はほぼすべてを保護者会に依頼し、デザインも保護者目線で仕上げた。

（イ）保護者・生徒への連絡・広報

本学院保護者に対して、迅速かつ確実に情報を伝達するため、FairCast（NTT データ（株）提供）システムを導入し、基本的に保護者のメールアドレスを登録している。災害・緊急時の情報伝達のみでなく、日常の事務連絡にも用いることで、保護者への迅速な情報発信を行なっている。

生徒に向けての連絡は、通常はLHRや授業時に行うことで問題ないが、警報発令時の連絡、台風通過後の学校からの連絡、生徒達に配布している学校生活マニュアル集「学院生活のしおり」によらない緊急連絡などはWebサイトを使って発信・連絡している。特に、2020年3月2日以降の一斉休校以降における、新型コロナウイルス感染拡大に伴う学校からの様々な情報提供はすべてWebサイトを用いてその都度こまめに行い、なるべく生徒・保護者の不安を解消することを目

指した。

(ウ) 学校に寄せられる情報

学校に寄せられる情報としては、以下の種類がある。

- ・ 警察・消防署・本庄市からの情報
不審者や災害状況などに対して注意を喚起する情報が寄せられることがある。必要に応じて、生徒に下校時の注意などを呼び掛けている。
- ・ 市民・公共交通機関利用者等からの情報
市民の方、電車の乗客の方から、主として生徒に対する苦情が寄せられることがある。状況を詳しく伺い、必要があれば生徒に注意を与えるとともに、ご指摘いただいた方に対しては真摯に対応するように努めている。

10. 学校評価

10.1 自己評価の実施状況

この学校自己評価については、2021年3月に項目ごとに担当者を割り振り、原稿を依頼した。

保護者に向けたアンケートは実施できなかったが、オンラインで保護者会幹事の2020年度学校運営に対する意見・感想を伺う場を4月3日（土）16:00より設けることができた。この内容については、後述する。

10.2 2020年度自己評価の主な点

以下は、2021年度 Waseda Vision150会議への本庄高等学院の報告として大学へ提出した内容からの引用である。

(ア) 入試関連

2021年度入試に向けて

2020年度一般入試・帰国生入試における、願書のWeb化、2次試験（面接）の廃止に続き、2021年度入試においては、入試会場の一本化（従来の2会場方式のうち、本庄会場をやめ、早稲田会場のみとした）等の入試改革に取り組みました。

入試広報の効果的展開

全国・世界から多様で資質の高い生徒を受け入れるため、かつコロナ禍に対応するため、新たにオンラインによる学校説明会を、例年よりも多く実施し、海外を含む遠方の方々も参加されました。対面の説明会ではできないPRもできたと考えています。同時に生徒寮の情報や相談の場を提供し、親元を離れての様々なバックグラウンドをもった生徒との共同生活の雰囲気も感じていただくことができました。

(イ) 教育関連

カリキュラム改定

2022年度からの新学習指導要領実施に向けた新カリキュラムを完成させました。コロナ禍中、教育のオンライン展開などで積み重ねた経験とリソースは、ポストコロナでのさらに質が高く工夫された授業展開に活かされます。

卒業論文指導の強化

第2学年からとりかかる長い探求活動の中で、卒論指導とともにライティング、プレゼン教育についても注力しました。また、オンラインによる卒論報告会を実施しました。

学部推薦選抜制度の充実

ミスマッチがなくモチベーションの高い生徒を学部推薦することを目指し、多面的学部推薦制度（G選抜）を実施しています。高大接続の一環で、学部との教育活動の連携や情報交換を密にし、生徒がそれぞれの学部・学科への理解をより深いものにできるよう努力しました。大学キャンパスでの対面による学部説明会は感染拡大防止の観点から行わず、オンラインで実施しました。同じくオンラインでのキャリアデザイン講座、大学院生による進路に関するパネルディスカ

セッションも実施し、学部で何を学ぶか・どんな未来を描くかをイメージできるよう、進路指導の充実を図りました。

地域連携プログラムの充実

予定されていた地域連携プログラムのうち、地元小学校との交流事業（総合的学習の支援）や、本庄市×Skyward EDGEコンソーシアム合同プログラム（早稲田、山形、東京理科、多摩美術、滋賀医科の5大学の学生が力を合わせて地域イノベーションを起こす！）等については、コロナの影響で生徒の参加が叶いませんでした。一方、地元小学校との合同河川調査は順延の後に実施することができました。また、大学教務部のサポートのもと、「企業連携ワークショップ」をオンラインにて開催しました。参加した生徒は「水」に関する課題解決に向け、企業との協働作業を継続する中で、意思決定のスキルや難しさ、喜びを経験することができました。

新体育館が広げる本庄学院教育の可能性

校舎隣に建設された新体育館（96号館）には、従来の体育館より広いメインアリーナの他に、部室やトレーニング室、多目的室等があり、換気も問題ないため、コロナ禍の中でも感染予防に配慮しながら、授業や部活動を継続することができました。ポストコロナで、より一層充実した授業や部活、各種イベントへの利用等による教育プログラムの可能性の拡大が期待されます。

（ウ）国際関連

2018年度に、1年間留学をしても高校3年間で卒業できる「第2種留学」制度を作りましたが、2020年度においては、コロナの影響で留学希望者はいませんでした。一方、コロナ禍でも留学や国際交流の良さを伝え、モチベーションを維持してもらうために、以下のとおり様々なオンライン企画を実施、参加しました。

特に新入生に向けて国際交流の良さを伝えるために、ミニシンポジウム「国際交流へのいざない」を開催しました。

ニュージーランドの私立女子校であるEpsom Girls Grammar Schoolと本学院ESS部によるミニ交流会を開催しました。

ハナ国際シンポジウム2020（オンライン）を開催しました。韓国の交流校Hana Academy Seoul主催のシンポジウムは一時中止となりましたが、生徒や経験者が立ち上がり、オンライン開催に向けた協議を行い、「文化交流」と、プレゼンを通じた「意見交換」を中心に実施されました。

立命館高校が主催する、世界で最大規模の国際高校生科学シンポジウムJapan Super Science Fair（JSSF）2020に参加し、本学院生も動画およびZoomで研究発表を行いました。

タイ・シンガポールの2校、国内2校で、国際シンポジウムAsia Academic and Cultural Sessions（本学院主催）を開催しました。

Singapore International Science Challenge2021（オンライン）に3名の生徒が参加しました。

国際部による留学説明会を、2度、生徒保護者に向けてZoomで開催しました。

10.3 2021年度計画

以下は、2021年度 Waseda Vision150会議への本庄高等学院の報告として大学へ提出した内容からの引用である。

（ア）入試関連

2022年度入試に向けて

2020年度入試における願書のWeb化と2次試験（面接）の廃止、2021年度入試における試験会場の一本化等の影響を分析し、2022年度入試に活かしていきます。

入試広報の効果的展開

全国・世界からさらに多様で資質の高い生徒を受け入れるために、ポストコロナにおいても対面に加え、オンラインでの展開を含めた学校説明会や相談会を開催し、海外からでも参加できるようにします。また、地元指定校向けの説明会や出前講義も実施します。早苗寮（男子寮）、梓寮（女子寮）の魅力作りを進め、海外や地方へのPR方法を工夫していきます。

（イ）教育関連

多様で資質の高い生徒を受け入れる環境の充実

親元を離れても、充実した学院生活を送ることができるよう、寮生に向けた独自の地域連携プログラムなど、引き続き魅力的な寮の在り方を目指します。学びの環境をさらに整備するとともに、生徒同士が議論し、互いに啓発し合えるラーニング・コモンズの的なスペースを確保できるよう、旧校舎（92号館）も含めた有効活用策を検討していきます。

教育効果の高いカリキュラムの検討・多様で未来的な教育プログラムの展開

2022年度からの新学習指導要領実施を踏まえ、新カリキュラムの整備、検討を継続的にを行います。コロナ禍中に得た、教育のオンライン展開などで積み重ねた経験とリソースを活かし、ポストコロナでさらに教育効果の高い、未来的な授業展開、メソッドの開発を目指します。また、地域連携（貢献）・企業連携・国際交流・研修活動・各種コンテスト参加など多様なプログラムで、本庄学院教育の可能性を広げていきます。

ミスマッチのない学部進学と将来設計を目指して

基礎学力と知的好奇心を備えた生徒を育成するために、学部との教育活動の連携や情報交換を進め、学部説明会等を実施します。キャリア教育、進路指導をさらに充実させるため、キャリアデザインウィーク（進学の部／就職の部）やキャリアデザイン講座について、同窓会や校友会との有機的な連携を作り、発展させます。

新たに日本医科大学に、高等学院、本庄高等学院、早稲田実業から推薦進学が可能となった（2022年4月より受け入れ）ことを踏まえ、同大学と3校が連携のうえ、キャンパスツアーや医学系の模擬講義等を企画、実施していきます。

高等学院との有機的な連携と附属生としてのアイデンティティ育成

2021年2月に高等学院との連携プログラムとしてWASS(Waseda Affiliated School Summit)を開催しました。また、教務部のサポートを得ながら両校主催で学部決定後の3年生を対象に企業連携ワークショップを開催しました。現在、高等学院側と協働連携プログラムの検討を開始しており、このことが新たな教育プログラムとして附属生としてのアイデンティティ育成につながることを期待しています。

（ウ）国産関連

留学の促進

1年間留学をしても高校3年間で卒業できる「第2種留学」制度や、Education New Zealand（ENZ）、アメリカKENT Schoolとの留学協定を活かし、本学院から海外に羽ばたく生徒の増加をめざします。特にENZでは個人の目的に沿ったフレキシブルな留学内容がカスタマイズできることが魅力で、その効果が期待されます。

国際部との連携の下、PR活動を充実させ、本学院で受け入れる留学生についても増加をめざします。また、英語版のWebサイトおよびパンフレットを作成します。

ポストSGHのプログラム

本学院には、長いSSH・SGH期間中に培われた経験と国内・海外校とのネットワークがあり、SGH後も国際プログラムをどう継承させていくか鋭意検討していきます。これまで実施してきたMah idol Wittayanusorn School（タイ）、National Junior College（シンガポール）、Hana Academy Seoul（韓国）、蘇州中学（中国）との生徒訪問・受け入れの交流については、コロナ禍で一旦オンライン化あるいは停止されましたが、再開に向けて努力します。これらの学校との連携については、未来的な国際交流のスタンダードとなるようなプログラムを双方で検討したいと考えています。

10.3 保護者からの意見

4月3日（土）16:00～17:00、Zoomを用い、2020年度の本学院の判断・動きに対し、保護者会幹事の方の意見を伺う場を設けた。

以下は、その場に出された意見である。

- ・ コロナ対策の動きが早かった。同じ時期、公立は混乱していた。
- ・ 6月末からの分散登校開始後、健康チェックのため、校舎の入り口が渋滞した。
- ・ 学校からのアナウンスが早く、親としても準備しやすかった。今から考えると過剰な対応だったとも思える部分もある。
- ・ 他校よりもオンライン授業や分散登校が長かったのも、他校でできている経験ができていない側面があり、子供にも色々な経験をさせたかったと思う。
- ・ 本庄学院は、広域から通学しているため、過剰に厳しくしたことは評価できる。
- ・ 親への連絡として使われたフェアキャスト連絡が素早かった。一方で、生徒への連絡手段として使われたMoodleは反映するのに時間がかかり、保護者と子供が持っている情報にタイムラグがあった。
- ・ オンライン授業期間中は、なかなか寮に戻ることができなかったが、そのおかげで子供との会話のきっかけができた。家族の理解が深まったように思う。
- ・ 連絡はスムーズだったが、オンライン授業の出欠席について不明瞭だった。
- ・ 学校の感染対策は十分だったと思う。
- ・ オンライン授業は附属のアドバンテージだった。通学時間がなくなり、余裕をもって学習に取り組むことができた一方で、附属校として学力の保証は十分なのか？という不安がある。
- ・ 出欠席が正しいのか、ということに確信が持てなかった。
- ・ オンライン授業期間に、子供の体力や視力が衰えた。
- ・ オンライン授業に対する生徒の満足度は、担当教員により様々であった。
- ・ 2021年1月から突然オンライン授業が開始されたが、定期が無駄になった。
- ・ 特色のある多彩なプログラム参加を期待して入学したが、全く参加できず、生徒が可哀そうである。
- ・ 基本的にコロナ禍の中、学校行事はどうしたら実現できるのか？という視点を持ってほしい。
- ・ 学校の気持ちが親に伝わりにくかった。
- ・ 保護者会誌「杜」の2019年版を見ると、生徒が楽しそうである。高校の多感な時期であるからこそ、いろいろなイベントを経験させたかった。今後も感染拡大が続くようであれば、最終学年を優先に、イベントを実施してほしい。
- ・ 中止になった国際交流プログラムの代替プログラムを実施してほしい。
- ・ 寮生に対し、制約が厳しかったことに対する子供たちの心のケアをしてほしい。
- ・ 生徒達の冒険の機会が失われた。

10.4 学校関係者評価

2020 年度 学校評価 関係者評価会記録

2021 年 5 月 22 日

概要

日時：令和 3 年（2021 年）5 月 22 日 15:30～16:30

場所：本庄高等学院中会議室

参加者：

評価委員（五十音順、敬称略）

- ・ 清水久美 （高崎市教育委員会）
- ・ 鈴木啓太 （本庄プロジェクト推進室副室長）
- ・ 高橋信介 （2020 年度 保護者の会会長）
- ※黒岩委員は体調不良のため欠席

本庄高等学院

- ・ 半田 亨 （教諭、学院長）
- ・ 影森 徹 （教諭、教務担当教務主任）
- ・ 新井宏嘉 （教諭、教務担当教務副主任）
- ・ 首村 努 （事務職員、事務長）
- ・ 川村悠太 （事務職員、記録係）

はじめに

- ・ 半田より開会の挨拶をした。
- ・ 半田より本会の趣旨について説明をした。

関係者評価

・ 関係者評価については事前に配布し、ご一読いただいた。それに加え、学院から特に補足が必要な点の概要を説明し、それに対し質問・ご意見をいただく形で実施した。

※紙面の都合上、本議事録には学院からの概要の説明は記載せず、ご意見・ご質問に関してのみ記載する。

※ご意見・ご質問を頂かなかった章については記載を省略する。

0. コロナ禍における 2020 年度学校運営

・ 半田より、高橋委員に保護者代表として昨年度の授業の全面オンライン化をどのように感じたか質問したところ、同委員より、この件についての保護者側の意見は賛否様々であり、まとめることは難しいだろうとする回答をいただいた。また、本会の資料により文章

化されたことで学院の感染症対策を改めて理解し、その努力に関する感謝の言葉をいただいた。

コロナ禍における学校生活の変化（授業のオンライン化など）に子供はどのように対応していたかという半田からの質問に対して同委員は、自分が見る限り、子供はオンラインへの移行に対して大きなストレスなくスムーズに対応していたこと、スマートフォンによる生徒間のコミュニケーションが大きな心理的な助けになっていたことを答えた。ただし部活動に入っていない生徒やクラス替え直後で自身が所属するコミュニティがない（あるいは少ない）生徒にとっては、学校生活の変化が大きなストレスになったと予想できる。これを契機に生徒が自身に合うコミュニティに参加できる機会を増やしてほしいという要望が寄せられた。

・清水委員より、本学院が適切な感染症対策を行っているという話は本庄市外にも聞こえており、世間的に評価されているという言葉をいただいた。

また同委員より、教職員には、コロナ禍が要因で心理的不調訴えるものはいたかについて質問があった。これについては半田より、そうした教員がいたと答え、オンライン授業の質の確保をプレッシャーと感じたことが主要因であるという分析も伝えた。

・鈴木委員より、入学式ができなかった新入生を対象とした大隈講堂見学に関し、早稲田文化喪失に対するケアが適切にできているのは素晴らしいという言葉があった。合わせて、同委員より今年はそうした行事を予定しているかについて質問があった。これについて影森より今年は始業より通常の対面授業を実施しているため、特段の代替行事は予定していないことを説明し、加えて、「2021 年度行事をできる限り催行する」ことが方針であることを伝えた。本年度も行事が中止となるとコロナ以前の行事のありかたを知る 3 年生が卒業となり、いわゆる学校としての伝統が途切れるため、催行に注力したいという考えである。

2. 教育活動

・AFS のボランティアとしても活動していらっしゃる清水委員より、昨年度留学生であるグエン・ヤーギー受け入れの体制が非常に適切であったと感謝の言葉をいただいた。

・清水委員より卒業式の実施方法についての質問をいただいた。半田より実施方法について説明したところ、オンラインの技術を最大限活用していること、公立高校との差について驚きの声があった。

・半田より高橋委員に、教育活動における不満などはなかったかと質問したところ、同委員より子供は授業・卒論・部活動のいずれも大きなストレスを感じることなく活動していたとの返答であった。特に部活動については、（保護者としては）最後の大会があっただけで満足している、とのことである。

これをうけて影森より、部活動の実施について、学校活動再開当初は県の指針にも曖昧

なところがあり学校全体として統一されたガイドラインを作成できず、各部でばらばらの活動方針となってしまったことの説明と、対外試合の保護者観覧などを叶えられなかったことを反省する言葉があった

4. 生徒への配慮

・清水委員より、コロナ禍を要因とする心理的不安で保健室の利用者が増えたことと関連して、学校のカウンセリング体制について質問があった。これについて首村より、保健室の体制（養護教諭、保健師、カウンセラーの人数など）を説明し、またカウンセリングについては大学の保健センターとも連携していることを説明した。

・高橋委員、鈴木委員もコロナ禍でのカウンセリングが重要であるとの意見であった。加えて鈴木委員より、受診者の傾向について質問があった。半田・影森より性別としては女子生徒が多く、学年としては1～2年生が多い傾向であると回答した。またこの傾向について、新たに高校生活を送る新入生とクラス替えが起こった2年生が多いことから、コミュニティが切り替わる節目で休校・オンライン授業となったことが大きな要因だと分析していることを伝えた。

また首村より大学へのカウンセリング依頼については件数が多いこと、大学ではオンラインによるカウンセリングを受け付けている旨が補足された。

5. 生徒進路

・鈴木委員より、基幹理工学部への進学者が減少していることについて補足説明を求められた。影森より、理系ではプログラミングなどを学べる学部・学科、文系では文化構想学部などが近年人気であり、純粋物理や純粋数学を学ぶ理論的学部や教育系の学部が不人気であることを説明した。

7. 教育研究施設

・2020年度の寮運営において寮費の返還が大きな課題となったことを説明したところ、高橋委員より2020年度の対応が今後の新しいルールになるのだろうかという質問をいただいた。これについて、半田より本件に関連して寮費の内訳を明確にしたことの意義は大きく、今後の指針になりうると説明した。

8. 社会・大学との連携

・影森より高橋委員に、保護者の会からの支援により食堂のパーティションや英語版学院案内が完成したことへの感謝を伝えた。また、半田より本年度は新しい保護者向けサービスとして学校公開を検討していることを伝えた。

・保護者の会代表である高橋委員より、授業のオンライン化に伴い保護者の会の活動も制

限されたことを残念とする声をいただいた。ただし他方で、活動のオンライン化が進んだことは、2021 年度以降の活動につながるもので、長期的な目で見れば好ましいとする発言もあった。また会として、今後は女性の活躍をより推進する方針を取りたいという表明があった。

・鈴木委員より近隣企業との今後一層の社会連携を期待する発言があった。

以上